

## 静岡県藤枝市岡部町松岡神社史料について (二)

岩下 哲典

〔前承〕前号では、松岡神社史料調査研究の経緯、松岡神社やの祭神松岡萬の経歴、松岡神社史料の概要を述べた。さらに本号で翻刻する「異国船横濱到来二付、水戸様・毛利様御立腹二付、諸狼<sup>⑧</sup>人出来始末」の史料解題を掲載した。

本号では、同史料積文を全文掲載する。なお、099―00等の099は、拙編『松岡神社史料を用いた調査研究報告書』八〇頁掲載の目録番号九九を示し、001は撮影写真一枚目をあらわしている。整理の都合上記載することとした。また□は、虫損等により判読が不明な文字である。傍註は岩下によるもので、( )は推定、明らかなものには( )は施さなかった。

また、積文作成に会っては、高橋泥舟史料研究会のイアン・アーシー、毛塚万里、服部英昭、本林義範各氏の多大なる協力を得た。記して御礼申し上げる。

史料翻刻 松岡神社所蔵「異国船横濱到来二付、水戸様・毛利様御立腹二付、諸狼<sup>⑧</sup>人出来始末」積文

(朱文方印) (朱文円印)

099-001

松岡藏書

松岡

異国船横濱到来ニ付、水戸様・毛利様御立腹ニ付、諸<sup>退</sup>狼人出来始末

099-002

嘉永六丑年今異国船到来今明治四未年迄天下混乱之次第

爰に印置候

099-003

松岡藏書

天下乱而混雜仕候節者穀物高直ニ相成候義、元今有之義也

天正<sup>年中</sup>之頃大坂落城之節ハ 米両二九舛位致候よし

今度徳川天下落城之節

慶應元年今 米高直ニ相成、同式年寅三月中

米両二八舛仕候、同四年辰ノ四月江戸落城仕候

099-004

向後若又天下混乱有之候ハ、惣穀用心可致候

米両二八九舛致候時

此米者風を引たか八九舛

早く直して四五斗させたい

抑、文久元年浪人出来候番嘉永六年丑八月中異国船相州浦賀

表へ到来ニ付、於 御公儀ニ御打拂可有之与諸士一同相待居候處、相州

横濱へ異人引上、交易致候を諸士迷惑之旨申与いへ共、公儀ニおゐて更ニ御取用無之故、諸浪人集り横濱表へ押寄打拂与巧候へ共、時節致らすして、銘々浪人追討被仰出候始末、左ニ印者也

嘉永六丑年八月中

御公儀より被仰出候御触書之事

先達而異国船浦賀江渡来候處、先月十二日帰帆ニ相成候得共、又々渡来可

致儀ニ付、追々御触書出候、依之此方可御武具類御修復可有之候、不足之分ハ

新規御調被遊候、依之追々御軍役之御人数并人足・小荷駄馬等其外之儀ハ

御用被仰付候間、兼而其旨相心得居可申候

嘉永六丑年六月五日

大目付 御老中  
御目付 相達候書付写 備前守殿御渡

0991005

今度浦賀表へ異国船渡来候ニ付、萬々一内海江乘入候義も難計

候間、右大口之節ハ芝邊(脇方)より品川最寄居屋敷有之万石以上之面々ハ

銘々屋敷相固メ候様心得罷在候様、急度可被相達候事

六月五日

同

御老中  
備前守殿御渡

六月八日

大目付  
御目付  
相達候書

嘉永六丑年御公儀分諸大名へ御達書

此度浦賀表へ異国船渡来ニ付而者御駒・兵器向ハ夫々世話有之候得共、銘々茂心得方可有之事

右之通り万石以上・以下之面々江可相触候、右之通り大目付・御目付可相達候事

同六月八日

御老中  
備前守殿御渡

大目付  
御目付  
相達し候書付

異国船萬一内海江乗入非常之場合注進有之候節ハ老中より

八代洲河岸火消役江相達、同前ニ而平日之出火ニ不紛様半鐘ヲ打出し、右を惣火消屋敷ニ而受継、同様半鐘打鳴し可申候、右之通り火消役江相達し置候間、火消屋敷ニ而半鐘打候ハ、諸向共御曲輪内出火之節之通り相心得登城又ハ持場くを相固メ候様可被致候、尤火事具着用候積り可被心得候、且又右ニ付而ハ場末迄ハ早半鐘行届不申候間、万石以上火之見櫓有之面々ハ其節ニ限り早半鐘打鳴し候様可致候、右之通り可被相触候事

六月

右之通り大目付・御目付江相達候事

御老中  
備前守殿御渡

嘉永六丑年六月八日

大目付  
御目付 相達候書付

浦賀表江渡來之異国船昨十一日退帆致候間、諸事平日之通り可被心得候

099-006

尤非常手当之分ハ銘々心弛之節無之様可被致候、右之趣可被相達候

右之通り大目付・御目付江相達候事

六月十三日

御老中  
伊勢守殿御渡

嘉永六丑年七月十四日

大目付  
御目付 相達候書付

西丸御普請二付、万石以上願上上納金被 仰付候面々并万石以下高割

上納金之分共御趣意茂有之ニ付、上納之義ハ被成御免ニ候間、右之趣厚

相心得、武備之義別而心掛ケ候様可被致候、右之通り万石以上・以下之面々江可被

相触候

七月 日

右之通り大目付・御目付江相達候事

御老中  
伊勢守殿

同 七月十四日

御側衆  
奥向江 相達し候

是迄質素節儉之儀被 仰出候へ共、御主意行届兼候間、此度被仰出之

趣、遺失無之様何連も勤柄之義、銘々心得も可有之、格別心ヲ用  
 徒法不相成様思慮可被致候事、右之通り表向之面々江相達候様奥勤之者  
 御側近く被相勤候義故、猶更思召相届候様、厚心掛格別御少略行届候様  
 可被致候事

七月 日

嘉永六丑年七月十四日

伊勢守殿御渡シ

御側 衆江

099|007

質素節儉之儀、前々々数度被 仰出有之候處、万石以上・以下共都而驕奢  
 之旧習不立置向茂有、且近年異国船度々渡来、彼是御備筋等之御入用茂

有之諸家者失遺(費力)不少、依而者此度於 公儀二五ヶ年之間、際立候御儉(約力)納

可被遊思召候間、右年限中何連も格別諸事雜遺を省防御米、武

備之筋一圖力を用可被申候、万石以下之面々は登 城二茂木綿之服取

交着用不苦候、其外兼而被 仰出候音信・贈答・供連・家作向等之廉々、惣而

右之振合准し格別之節儉相用、此度沙汰之趣、能々行届候様、一同厚

可被心得候、就而ハ追々御取調之義も有之候間、此上共等閑之輩有之候ハ、夫々

沙汰之品茂可有之候、右之通り可被相触候、右之通り大目付・御目付相触候間、可被其

意得候

嘉永六丑年七月十二日

御老中  
和泉守殿御渡

大目付  
御目付 相達候書付

異国船至來ニ付、公方様御病氣

公方様少々御中暑ニ付、為伺 御機嫌溜詰同格・鴈問詰・御奏者  
番、明十七日四ツ時可有登 城候

但シ、鴈問詰・御奏者番嫡子ハ登 城不及候

病氣・幼少・在国・在村之面々ハ使者不及差出候

右之通り可被相觸候

七月十六日

御老中  
和泉守殿御渡

右之通り大目付相達候事

嘉永六丑年七月十七日

大目付  
御目付 相達候書付

公方様御中暑ニ付、為伺 御機嫌、溜詰同様<sup>類</sup>・御普代衆・高家・鴈

問詰・同嫡子・御奏者番・同嫡子・菊問縁類詰<sup>類</sup>・諸番頭・物頭・布衣以上

0991008

之御役人、明十八日四ツ時可有出仕候

病氣・幼少之面々ハ月番之老中使者可差出候

在國在村之面々ハ月番之老中飛札可差越候

右之通り可相触候

七月十七日

御老中  
伊勢守殿御渡

右之通り大目付・御目付相達候事

嘉永六丑年七月十八日

大目付  
御目付  
相達候書付

火之番・御門番等相勤候面々之仕来ニ而無益之入用不少由候、此度質素節儉之儀被 仰出候 御主意不違様右之面々勤方ニ付、相掛可然□

廉与に嚴敷省略致、番士之輩茂木綿着服は勿論更替等之節

都而花麗無之様可被致候、 右之趣可被達候

右之通り大目付・御目付相達候事

七月十八日

御老中  
伊勢守殿御渡

嘉永六丑年七月十九日

大目付  
御目付  
相達候書付

此度質素節儉之儀被 仰出候而者右年中ハ諸大名其外

より老中・若年寄其外等差定候贈物之外、時候為見舞

贈物之義、無用可被致候、尤家来江贈物、右之趣面々江可被達候

右之通り大目付・御目付相達候事

099-009



七月十九日

嘉永六丑年七月十九日

大目付  
御目付

御老中  
伊勢守殿御渡

養子取組之儀ハ筋目等相糺候義者勿論之事ニ候、近来ハ持參金

專抱取組候趣も間々有之哉ニ相聞、左様ニ而ハ有之間敷ニ候、既安永

三年無<sup>(三)</sup>急度相達候趣も有之候處、年数も相立候義ニ付、猶又右之趣

相心得、女子縁組之儀も右ニ准し心得違無之様可致候間、面々江可相達候事

右之通り天保七申年相達置候處、養子取組之儀、兎角持參金ニ相抱

候流弊、今以相止不申哉ニ相聞、如何之事候、今度質素節儉之儀ニ付

被 仰出も有之候折柄、旁養子縁組等之儀、持參金等之儀ハ勿論向後

聊たり共無之様、銘々厚相守可申候、若此度相触候趣等閑ニ相心得

如何之筋も相聞候ハ、急度沙汰之品も可有之条、心得違無之様可致候

養子致候節其家ニ弟又ハ厄介之内筋目有之者ニ而実ニ病氣ニ而往々

御奉公難相勤程之者は廢人致候義、無余義筋ニ候へ共、左之義無之もの

に而も病氣等ト申立ニ而相除キ候上、他人養子相願候類も近来追々有之

是以多ハ持參金ニ抱候儀与相聞、養子本儀ヲ取失候筋可相成、且厄介共

一生之浮沈ニ相響キ、尤以歎ケ敷義ニ候間、向後右躰不都合之義ハ無之様、其筋

二而能々遂吟味、都而正路取計候様可致候、右之通り面々可被触候

七月 日

右之通大目付・御目付相達候事

伊勢守殿御渡

099-0010

御渡書

諸家留守居取締之儀ニ付てハ前々より之達、御咎相成候者も不少候處

又々相弛ミ、近來は別而風儀不宜同席計ニも無之、他席并更ニ出會致間敷

御改方家來共も相交、酒食遊興如何敷參會致、其上留守居役<sup>例也</sup>列

外之様ニ心得違致、家法相背輩有之哉相聞、以之外不屈之至りに、更ニ御

糺可有之候得共、是迄之始末ハ格別之御宥免ヲ以、御沙汰不相及候間、向後

不取締之儀無之様、主人より嚴敷可被申候間、若前条之族有之ハ、參會

之者一同重而御咎被 仰付、主人茂可為越度候、右之趣可被相触候

右之通り相触候ニ付而ハ御役相勤候面々、兼而家來共取締方、主人より嚴

敷申付可有之候へ共、中には心得違之面々有之哉ニ相聞、如何之事ニ候、就而ハ

以後流弊之仕癖、急度改候様御役人之面々へ可相達候、右之通御役人之面

々江相達候、各方ニは勤柄之儀、猶又家來之取締方能々可申付候

七月十九日

和泉守殿御渡

嘉永六丑年七月十九日

大目付  
御目付 相達候書付

公方様御中暑御同様ニ而御勝不被遊方ニ付、為伺御機嫌、溜詰同格

國待大名并庶統御普代衆・外様大名・高家鷹間詰・同嫡子・御養子者番(御奏者番カ)

同嫡子・菊之間縁頼詰交替寄合・表高家・諸番頭・諸物頭・布衣以上之

御役人、明廿日四ツ時可出仕候

病氣・幼少之面々は月番之老中へ使者可差出候

在国在村之面々は月番之老中へ飛札可差越候

右之通可被相触候

右之通大目付・御目付相達候事

099-0011

嘉永六丑年七月廿三日

大目付  
御目付

和泉守殿御渡

御公方様御病死

公方様不側御養生不被為叶、今已下刻薨御被遊、此段今日出仕

無之面々(江之)可被達候

七月廿三日

右之通大目付・御目付相達候事

嘉永六丑年七月廿三日

和泉守殿御渡

公方様薨御二付、今日より普請鳴物停止候間

右之通相触べく候

右之通大目付・御目付相達候事

井伊掃部守御大老

和泉守殿御渡

嘉永六丑年七月廿三日

大目付  
御目付 相達候書付

公方様定式之御着服被為請候事

七月 日

右之通大目付・御目付相達候事

此公方様異國船渡来二付、毒害二而相果給ふ也

此時御大老井伊掃部頭殿也、此時謀判をおこし

099|0012

是より程過、水戸殿隱居謀判致し候、諸浪人多出し、御大老

井伊掃部頭殿首桜田御門外二而取打夫（マ）諸浪人押出し候

嘉永六丑年七月廿三日

大目付  
御目付 相達候書付 伊勢守殿御渡

右大將軍(マ)様今日直二本丸江御引移之事二而者候へ共、御差急之儀  
二付、兩 御丸共得与御片付込ハ折々西丸江も被為入候筈二候、此段  
為心得今日出仕無之面々江可被相達候

右之通大目付・御目付相達候事

嘉永六丑年七月廿三日

和泉守殿御渡

大目付  
御目付 相達候書付

七月廿三日 惣出仕

同 廿四日 右同断

同 廿五日 右同断  
万石以上面々

右之通り

右大將様為伺 御機嫌出仕候様可被相触候

右之通大目付・御目付相達候事

和泉守殿御渡

嘉永六丑年七月廿三日

大目付  
御目付

0991013

公方様薨御二付

右大將様為伺 御機嫌、病氣・幼少并隠居之面々ハ老中へ

使者可差出候

在國在村之面々は月番之老中へ使札可差越候

右之通り可被相触候

嘉永六丑年七月廿三日

備前守殿御渡

大目付  
御目付 相達候書付

公方様薨御二付、万石以上・以下其外輕キ者共并倍(ママ)臣迄月代

剃候日限之義、追々可相達候間、其段面々江可相達候

右之通り大目付・御目付相達候事

嘉永六丑年七月廿三日

伊勢守殿御渡

御本丸  
西御丸 御側衆江

御本丸

川口志摩守

西丸

鈴木大隅守

御小姓

御小納戸

奥醫者

其外輕キ者共迄

099-014

右勤方之儀、先只今迄之通り可被相心得候

嘉永六丑年七月廿三日

大目付 相達候 伊勢守殿御渡

御本丸諸役人其外御番衆・其外輕キ者共迄勤方之義、先只今

迄之通り相心得候様可被相達候事

右之通り大目付・御目付相達候事

三百石 甲持 壹人

若黨 二人 鎗持 壹人

挟箱持 壹人 草履取 壹人

御馬捕 二人 御荷駄馬 貳人

九百石

若黨 六人 (甲九) 早持 壹人

挟箱 貳人 鎗持 三人

御馬捕 四人 草履取 二人

鉄砲持 四人 小荷駄馬 二人

異国船浦賀表江渡来候二付、諸役人評議有之候へ共、評定まちく

二付、公方様へ毒薬相用候者有之、右公方様御中暑与申し、毒害二而

相果給ふ、依之右之趣被 仰出候、夫今又々異国船渡来、横濱へ

普請いたし交易与相成候二付、天下之役人混乱二相成候、此時又々

此度異国船浦賀へ押寄んとする時、品川表今浦賀迄御固メ

之人数左ニ印候

0991015

異国船到来ニ付

江州彦根城主

江戸今品川迄

高三十五万石

御固メ之人数

(ママ)  
伊井掃部頭

相州三崎御固メ惣勢貳万八千人、何れも具足を着し候

野州宇津宮

高七万石

戸田伊豆守

右同断

なり

井戸石見守

右同断

なり

奥州會津城主

高廿三万石

松平肥後守

相州浦賀御固メ惣勢八千人、何れも具足着し候

武州忍城主



高十一万石

松平下総守

右同所御固メ惣勢五千人、何れも同断

武州川越城主

高十七万石

松平大和守

同大津固メ、惣勢万貳千人、何れも同断

肥後熊本城主

高五十四万石

細川越中守

武州本柰之御固メ、惣勢壹万六千人、何れも同断、

長門萩城主

高三十六万石

松平大膳太夫

武州大森御固メ、惣勢壹万人、銘々旗印立、具足ヲ着し候

伊豫字<sup>(和)</sup>□嶋城主

高十万石

伊達遠江守

武州神奈川臺御固メ、惣勢六千人、何れも同断、馬印立

扣たり

阿州徳嶋城主

高三十五万石

松平阿波守

武州佃田鉄炮洲御固メ、惣勢壹万貳千人 前同断

越前福井城主

高十五万石

松平越前守

武州品川御殿御固メ、惣勢八千人 右同断

播州姫路城主

高十五万石

酒井雅樂頭

同州高輪海邊御固メ、惣勢八千人、外四百人騎馬役

因州取鳥城主  
(マメ)

三十五万石余

松平因幡守

同州芝浦御固メ、惣勢壹万三千人 前同断

筑後柳川城主

高十一万石

立花左近将監

上総国深川洲崎御固メ、惣勢六千人 銘々目印相立扣たり

下総佐倉城主

高十一万石

堀田備中守

下総海邊之御固メ、惣勢壹万五千人なり 右同断

上総姉ヶ崎城主

高一万五千石

水野壹岐守

上総姉ヶ崎御固メ、惣勢二千人なり 何れも右同断

讚州高松城主

高十二万石

松平讚岐守

武州濱御殿之御固メ、惣勢七千人 何れも旗差物二而

扣たり

高十五万石

松平下総守

(マ) 武州大夫 嶋洲(輪カ)ヶ崎御固メ、惣勢八千人 なり

高壺万石

林播磨守

上総貝渕御固メ、惣勢千七百人 なり

松平肥後守

武州鉄炮洲御固メ、惣勢壹万式千人 なり

阿部駿河守

同州八幡之御固メ、惣勢式千人 なり

松平肥後守

右者天神山之御固メ、惣勢壹万五千人

稲葉兵部小輔

(マ) 房州盛京臺高の嶋御固メ、惣勢三千式百人

(マ) 武州石槻城主

大岡主膳正

上総浦御固メ、惣勢千五百人

此外御旗本あまた御固メ有之、高輪より相州浦賀迄惣勢凡廿八万余騎にて、昼夜之わかちなく御出馬にて御固メニ御座候、前代見物候事、依之異国船帰帆いたし候ニ付、公儀御役々様御評定有之

099—018

品川沖へ御臺場御筑立之御目論見御座候

此時御役人左之通

御老中

若年寄

阿部伊勢守

本多備中守

松平和泉守

本庄大内記

牧野備前守

大番頭

久世大和守

九鬼式部少輔殿

板倉内膳正

御勘定

松平河内守

御船頭

御材木奉行

向井将監殿

青山鉄之助

御林奉行

御金奉行

岡本織之助

星野市郎兵衛

御海邊見廻り役

御鉄炮方

大久保彦左衛門

田付四郎兵衛

同役

同玉薬り奉行

浅野一角

永田帶刀

御目付

大筒頭

江川中務少輔

井上定太夫

御普請奉行

中川飛驒守

099 | 019

右之御役々様異国船又々渡来有之候ハ、可打拂与御評定有之候得共、諸家様方治平之御節柄故歟、評定一決不致して先異國用意之ため、御臺場御普請御評定被遊候

嘉永七寅年内海御臺場御普請二付、當村御林御伐出し被仰付

其外山田御林共御伐出相成、其節御普請役 嶋崎勇三郎様御出役

被遊、當村御林松丸太二長サ式間半より三間迄、末口三寸五分四寸迄、此伐歩尺ノ壹本二付、永拾五文也、御林分猿田川岸迄、車力賃永四十文也、猿田川岸より江戸新橋迄船運賃、永六十文也、右伐歩運賃車力賃迄

御上様分被下置候也

右者御材木大急ニ而當村近邊村々江人足触出し、村々分高百石二付

松丸太拾本ツ、被仰付、猿田川岸迫津出し仕候、此時車力人足、村々八柵(八柵)

鵜木村・川崎村・奥戸村・大久保村・迫間村・高橋村・助戸村・大月村・利保村

塩嶋・渋乗(重)・八木宿・菅田村、右村々車力人足也、但シ船積人足相勤候村々

常見村・山川村勤濃也(マ)

安政 七申年正月廿七日嘉永御普請役嶋崎勇三郎様御出役二而二月

三月迄懸り是令御臺場御筑立ニ相成申候、猶又異国船渡来仕、横濱

拜借仕、異人横濱へ御普請す、依之天下一統大乱与なり、此時水戸殿

毛利殿心を合セ横濱之異人可打拂与評定致し候へ共、諸家方不承知

二而終ニ一決不致、依之伊井掃部頭御大老之意(威力)ヲ振し、異人ハ女を賣(マ)、猶又

異人大切ニ可致杯与相触候ニ付、水戸殿令浪人出、横濱征伐可致与種々

心掛る予いへ共、天下之役人更ニ御用無之異人而已大切ニ取扱候故、浪人共

申合、異人征伐之手始メ与して安政七年申年三月三日

(マ)伊井掃部頭登 城之節諸浪人申合、大雪ヲいとわつ桜田御門外

ニおゐて御大老伊井掃部頭殿ニ切懸ケ大戦ひいたし、終ニ大老之首生取

0991020

其節之始末左ニ

(マ)伊井掃部頭殿令御届ケ書写

今朝登 城掛、外桜田御門松平大隅守門前令上杉弾正大弼辻

番所之間ニ而狼藉者、鉄炮打掛、凡廿人餘り拔連(マ)加駕を目掛切込候ニ付、供方之者共防戦いたし、狼藉者壹人討留、其餘り手疵深手等為負候ニ付、悉く逃去申候、拙者儀捕押方指揮いたし候處、怪我いたし候ニ付、一先帰宅候、尤供方初メ良死(田)・手負之者、別紙之通御座候、此段御届申上候、以上

伊井掃部頭家来(マ)

日下部三郎右衛門

片桐權之丞

即死 河西忠左衛門

同 沢村軍太

安政七年申三月三日  
桜田御門外ニ大合戦

手疵 桜井伊三郎

同 小河原秀之丞

桐原徳之丞

即死 加田九郎太

手疵 岩崎徳兵衛

同 水谷求馬

099-021

永田太郎兵衛



草刈鋏五郎

薄手  
松井貞之丞

萩原太次郎

手疵  
陸尺 弥右衛門

越石源次郎

取持甚之丞

渡邊泰藏

藤田忠藏

吉田太助

同 勝五郎

今朝五ツ時頃 掃部頭殿登 城之様子辻番人共見受罷

在候処、何者共不相分、六、七人白刃拔例、御行例江切込、其内多人數

立ふさかり様子ハ稔与見届不申内、黒羽織袴ニ而手疵請候者、辻

番所江駈込、暫仕、六、七人拔身携、内老人馬乗袴腹立取候者

白刃江首ヲ貫ぬき、日比谷御門之方江相越申候、持場外之儀ニ御座候得共

099-022

不容易騒動ニ付、此段御届申上候、以上

三月三日

龍ノ口、但馬守辻番通り場之内ニ今五ツ時過侍躰之者、男之喉を突切害致候者并九死一生之者、首を提候者<sup>(マ)</sup>人有之旨辻番人申出候間、早速懸り之者為見届候処、相違り<sup>(マ)</sup>無之、尤主人名前承り候処、元松平修理太夫家来之由申候得共、言舌相分兼申候、依之手当仕置、此段不取敢御届申上候、以上

三月三日

遠藤但馬守家来

木下七左衛門

掃部頭様江

御上使用有之候事

三月三日

即刻御様子御尋之御上使御側衆御二方

塩谷豊後守江御上使被 仰付候

三月四日

朝鮮人參 拾五匁

<sup>(鮮魚之)</sup> 壺折 酒井右京亮

氷砂糖 壺壺 御上使

三月五日

<sup>(鮮魚之)</sup> 壺折 薬師寺筑前守

氷砂糖 壺壺

099-023

三月四日

比<sup>(マ)</sup>

日比谷御門御勤番

右者此御門ヲ浪人首を携へ罷通り候ニ付

此御門番、片桐様三日之御出張ニ而番頭

切腹仕候

同十二日 松平大隅守様閉門被 仰付候

同十日 伊井掃部頭様御書腹(ママ)之故、若君愛磨君

御年拾三才ニ而御嫡子之御届有之候

同五日 御吟味有之、水戸殿家来

桜田御門外ニ而大合戦之節、深手ニ而辻番之者ニ見咎メニ

預り右之者御召捕ニ相成、御吟味請候者

大関和七郎

廿五才

一通り御尋之上

森 五六郎

細川越中守家来江

廿三才

御預ケ

杉山弥一郎

三十八才

森山繁之助

廿六才

黒沢忠三郎

三十式才

099 | 024

水戸殿家来

蓮田市五郎

廿八才

前同断

右、於評定所

御高七万石  
寅ノ御門

寺社御奉行

松平伯耆守

御高五千五百石  
牛込かしやしき

大目付

久具(貞)因幡守

町御奉行

池田播磨守

御勘定奉行

山口丹波守

駒井山城守

右御立會

伯耆守・播磨守・丹波守御調被成候事

三月三日朝五ツ時過、伊井掃部頭(マ)様御登 城先外桜田御門外

099 | 025

御堀端上杉彈正大弼様辻番際ニ而浪人躰之侍拾四、五人程出

掃部頭様(マ)加籠目掛、無法ニ切掛、及騒動ニ候、掃部頭様御供方

前後致散乱候事

右場所ニ而掃部頭様御家来之者、四、五人即死与相見へ、其外

怪我人等何れも御同勢之内ニ而即時ニ屋敷へ引取候事

一 相手方之者追々日比谷御門之方へ逃去候内、式人ハ八代洲

(河)岸、増山様辻番脇へ数ヶ所之疵負、即死いたし候事

一 右之内式人、壹人ハ何者之首や生首を手ニ提、脇坂様表

御門江罷越、葉を無心致候得共、色々之事故、彼是手間

取候故、立戻り龍ノ口南堀端ニ而右兩人之内壹人ハ自害、壹人ハ生首

を提、不容易手負ニ而九死一生之者、側ニ波々(マ)明江右首を入置、此九死

一生之者并首共ニ遠藤但馬守様辻番江引取

一、同時前相手之者内、四、五人何れも数ヶ所之手負ニ而脇坂様表門江

欠込御勝手へ罷越候

一、右之者共何れも伊賀袴又絹股引等ニ而割羽織を着し

木綿ニ而鉢卷襷(マ)キ等相掛、下駄・傘等有之候

一、右騒動之場所ニ而鉄炮鉄張之陣笠(マ)壱ツ、外ニ棧留之風呂敷包ニ

致し刀之様なるもの相見候

一、上杉様分外桜田御門外へ御人数野服ニ而出張罷在候

水戸殿家来

安政七年申三月三日

佐野竹之輔

0991026

黒沢惣三郎(忠力)

蓮田市五郎

斎藤監物

廣岡子之次郎

大関和七郎

山口辰之助

増山弥市郎

森五六郎

鯉川要人

廣木増之助

稲田市蔵

増子金八

関 鉄之助

高橋多一郎

水戸殿家来、掃部頭  
登 城ヲ目掛切掛候  
者共深手薄手之者如  
斯二御座候

林甚右衛門

森山繁之助

是より天下一統大乱与相成、諸浪人多分出来所々おゐて合戦

有之候、安政八年右掃部頭不慮之儀ニ付、御高拾万石被召上候ニ付

掃部頭家来一統評義之上、公儀へ 御歎願書奉差上、公儀ニ

099-027

おゐても御仕方無之、依之其儘ニ差置候とかや、其文ニ目<sup>目</sup>

伊井掃部頭歎願御高拾万石被召上、此時御歎願書差上申候其文に曰<sup>マ</sup>

以書付御歎願奉申上候

井伊掃部頭儀此度京都 御守護御免且又領地之内蒲生・神崎二郡

御用ニ付、被仰渡、誠ニ以家中一同驚人候事ニ御座候、就而者右様被仰付候子

細柄かつ、御歎願筋等弊藩重役共迄毎々申出候得共、公命之儀者

難易ニ不拘決而違背仕間敷旨、先祖直孝遺言も有之、且此變<sup>事カ</sup>卒之折

柄、右様被仰付候義者深キ御子細も可有之被存候へ共、決而動揺<sup>ヤカ</sup>仕候義者不相成

段 種々理解申聞、拙者共申立候事共、一切取上不申候、元来掃部頭家

之儀御譜代席申通分之人録ヲ頂戴仕、京都近キ被指置候義ハ<sup>(中、通分之大緑カ)</sup>

権現様深キ思召被為在御深密之御用被仰付置候義ニ而式百餘年非常

之節、人数操出し方手配兼而御用意罷在候事ニ而士分之者者

百石以下少録(マ)たり共悉く馬を為飼足輕小者(マ)ニ至追、京都江日着仕

候者ならてハ召抱不申規則相立被置候儀も全御用蒙り居候跡柄(ト)(訳柄カ)

御座候、且安政度被 仰出候ニ付 御守護向一廉手厚ニ仕候様

被仰出候ニ付、夫々人数指出し置、御所司代御指圖次第、何等之御用

筋、急度可相勤心得ニ罷在候處、卒所(幸附之) 御免ニ不申候子細から相分

不申、且又地方續仙臺領・郡山領其外一圓之儀ニも無之、掃部頭領内

ニ限り候へハ是又御用柄一切相分不申候、當 掃部頭義ハ乍幼年一昨年

格別之 上意ヲ以遺領無相違被下置、其後も毎々御懇(ネ)之 上意を

蒙り、當年ハ 御大禮 上使も相勤、官位等昇進被仰付候

折柄、前職 御守護 御免式郡上知之儀者全先掃部頭在職中

不都合之次第柄有之故之儀も可有之哉、就而者先掃部頭右職中勤向

之義ハ家来共ハ重役を初申談候事一切無之、惣而御公役方等評義之上、夫々

台命相窺取計候趣ニ而在職中彼是諫言仕候家来とも有之候へ者

099-028

公邊之儀者曆々(歴々)御役方萬事御評決之上、御所置被為在候事故、其方

とも安思(案カ)ニ不及旨申聞候 公方様ハ誠忠之ニ大字御直筆ニ而

賜り、猶又一昨年三月三日登 城之折柄狼藉ニ出逢、不慮之怪我

致候節も上使として御若年寄御側等御指向被下置、天下之動揺相



成候而者以手之外之儀ニ付、一藩中難忍ヲ忍候様ニと御内沙汰被下置、其後も毎々御懇之 上意を蒙り候得者、重役とも右之趣意堅相守り、且國主外様方とも家柄(ママ)ニ候得者、弊藩(ママ)天下之騷擾(シヤウシヤウ)を醸シ候而ハ如何ニも不相濟段、堅申聞候ニ付、君臣之大義を忘れ腰抜共之世話(評カ)蒙り傳候得者、忘拳(ケン)(妄拳カ)不仕、辛抱罷在候義ハ 上意を重し奉候故之義ニ御座候、其後も前条申上候次第ニ而幼年之主人江出格之思召を以、遺領も直様被下置 上使御用・官位昇進等被 仰付誠ニ以難有 上意之段深く馳裁仕、一統弥増 上意ヲ重し罷在候義ニ御座候、然ル處、今日 幼年掃部頭江右様存外之事とも被仰付候義者先掃部頭右職中之咎(在カ)メニも可有之候哉と奉存、愚昧之拙者共一統承服不仕、若亦一藩上下腰抜ニ而御守護向無覺速思召候義ニ候ハ、一昨年來 台命を重し深く慎罷在候義ハ、一統心得違仕居候義ニ御座候、若又當夏薩長ニ藩京都江罷在候以來御守護向不都合ニ被思召候ハ、只今迄何之御指揮(キ)も無御座候ハ、如何ニ御座候哉、若又御守護向不行届有之輩下騷擾(シヤウ)致候儀を御咎メ被仰渡候儀ニ候ハ、其騷擾為致候者共ハ如何之御所置可被遊候哉右不明白ニ而存外之事共被 仰渡候様奉存候ニ付、有志之者共申合重役共江段々歎願筋申出候得共、前許(件)之通り准(唯)

台命之重キハ先祖直孝遺言を堅相守、一切取上不申候ニ付、拙者共一  
 統存意相違仕候ハ無拠國許立去り不恐願御役場江御歎願申上候  
 抑、六、七年來異人渡來ニ付、天下之誠論種々相立候得共、打拂  
 之義ハ

権現様以來御定法ニ而日本武士之異儀なき所御座候、然ル處、一旦  
 099—029

交易御許容ニ相成候事、於公邊も深思召も被為在、一時應變之御所置  
 ニ而行々ハ御定法之通り打拂被仰付旨承知罷在候、是又天晴御用相勤  
 可申与無事相励罷在候処、先掃部頭逝去被致候後、姦臣長野主膳

宇津木六之丞等、重役木亦清左衛門、廣原助右衛門ヲ謝（ママ）、兎角  
ネイシツトウ  
 佞柔諂

諛ユウ（ママ）之言を相勸、忠直武勇之士氣を搔カキ、専ら太平を唱へ追々國害ヲ

醸シ候ニ付、有志之者情激フシケキ（憤激）之餘り天罪訴出、當八月下旬右四人之者

愁（愁）鬱被申付候、右所置濟、國政一新武備忘實專一ニ相心得居候處

於公邊も大變革被為在、弥攘夷之御新政被為在候折柄ニと奉伺候

ニ付、殊更一藩奮興仕候、如何様御用筋も急度相勤、是迄腰拔等之

世話（評カ）一洗仕候

権現様已來大恩を奉報、直政・直孝之遺忠を續、天晴 公邊

之柱石と復古可仕与一統勇を含罷在候處、存外之被仰渡二付、一藩上下  
落擔泣血仕候次第二御座候、実以弊藩之義ハ二百餘年格別之

上意を蒙り、格別之大録ヲ裁、格別之御用筋相勤居候處、俄ニ家格被召上

候ハ、從是國来(ママ)衰弱(弱)し趨衰仕、遂ニ御用筋も難相勤候而者

権現様以来格別之思召被下置候御深志も消失可仕哉と歎敷次第二

奉存候、厚唇言齒寒腹を割腹ニ忘(註) (唇亡齒寒、股を割腹ニ充カ)之譬も御座候得共、拙者共願出候

存意決而 公命を柄ミ候儀ニ無御座候、厚 公儀奉重候心得ニ

御座候、尤弊藩重役とも前条利解而已申居候而者有志之者共承服

不仕、行々一藩騒動ニも可及歟与甚以心配仕候二付、拙者共兩人御歎願申

出候、何卒愚昧之微衷(微衷) 深御賢察被下置、御憐憫之御沙汰被 仰出被

下置候様、偏奉願上候、以上

文久二戊年十一月

井伊掃部頭家来

加藤吉太夫

岡村吉之丞

099—030 (註) 唇亡齒寒 (唇亡びて齒寒し)

蒲哭三年恨有 助け合う関係にあるもの

涂異臣大義果 一方が減びると他の一方の存

何□<sup>(如カ)</sup>一刀是筆血

是墨為□<sup>(寫カ)</sup>

在も危うくなること、(出典、  
春秋左氏伝)

公家□白書

股を割いて腹に充たす

折越羽織裏二白<sup>(打裂カ)</sup>  
<sup>(口カ)</sup>

将来の事を考えず、ただ目先

寝てすます、起ては猶も、すまぬ世に<sup>よ</sup>

の欲満たしたという故事

死より外の、道なかりけり

(出典、貞観政要)

以書付御歎願奉申上候、京都御守護御免、二郡上地之義ハ先達而來

御上ニおゐて深 御心配被為在候段、乍蔭奉承知誠ニ以恐入、御口惜次第

奉存候、然ル處、二郡村々之者毎々御歎願申出候へ共、御取上難相成筋合ニ而追々

御引渡之御都合ニ相成、二郡御百姓之者共歎敷存、江戸表江直訴願出候様

承り申候間、拙者も同道罷越、必死之覚語<sup>(ママ)</sup>ニ而相働度奉存候處、却而

御上之御為方ニ相成申問敷段、色々利解致候者有之ニ付、見合申候、御家名

二者登 城等被仰付萬端被 仰出、彼是等御指問御考被遊候故之義ニ

可有御座候得共、拙者共ニ到候而ハ一々御様子柄も承前不仕、畢竟評判

之上之事ニ而違之義共存込、一ト<sup>題</sup>寐賢<sup>(マヤ)</sup>を不安心配ニ有之、義僕百姓とも

同道為見合候、以後も私とも一切手附不申候、依之別紙歎願書江戸表

御老中御月番江指出、直様自殺仕候ハ、乍存國家之御為ニも可相成ニ決

心仕候間、今十五日爰許發足罷下り申候、表向引込ニ而罷越候へ共、永々御暇

頂裁仕候後ニ而跡式之義、御定法之通り被<sup>レ</sup>

099-031

仰付被下置候間、遣恨無之候、乍然前後相弁不申候家族とも有之候ニ付

御憐愍被下置候ハ、重々難有仕合奉存候、此段書残し願置候間

宜被 仰上可被下候、以上

戌十一月

加藤吉太夫

折越羽織裏ニ曰く

萬山不重

公命卒し

一發不輕

一命輕し

(註) 万山不重 君恩重 一髮不重

我命輕 (大石内藏助拜刀の銘)

099-032

井伊掃部頭家来加藤吉太夫・岡村吉之丞、此間中國元立去り罷下り申候

処、吉之丞義途中ニ而病死仕候ニ付、吉太夫老人御役場江參上仕、歎願書

御落手、御左右モ不相待、短慮之仕形ニ及、御場所柄奉汚候段、薄々承知

仕、誠ニ以奉恐入候事御座候、吉太夫義者拙者共同志之者ニ而兼而同道御歎

願可申上旨申談候へ共、騒敷罷出候而者奉恐入候間、右兩人參上仕候處

存外之結末ニ及、呉々ニも恐入候事御座候、乍然御歎願申上候次第柄、拙者

共同意御座候間、国元立去り不顧恐御歎願申上候、乍恐愚昧之微衷御賢察被下置、幾重ニも御沙汰被成下候様、偏ニ奉願上候、以上

戌十一月

宇津木 右門

磯貝 長右衛門

大和田 義太夫

099-033

細野嘉藤次

橋本六郎治

久保田層九郎

小幡 釦(券方) 玠(昌方)

宇津木 畠吉

文久三亥年浮浪人数多出来、公儀ニおゐて新徴組  
水戸誠心組・長州浪人・一座―薩州浪人出来申候

遠城平左衛門

右歎願公義江奉差上候ニ付、掃部頭知行取上ニ相ならず、武鑑ハ拾万石へり候へ共、御高ハ障りなし、是より浮浪人多分出来、当時合戦所々有之

099-034

追々浮浪人数多出来、新徴組、猶又水戸誠心組其外長州浪人

杯与申唱ひ御府内へ押出シ所々へ無心申掛、町人共無心聞入不申候節ハ

切殺シ又ハ家内之者擲取、無理に金銀―(奪カ)擲―含取、且又商人(江カ)ひ押込

喰込致候者も有之、所々おゐて辻切等有之候ニ付、無據御府内町々口々

へ木戸相立、只今ニおゐてハ事之外嚴重ニ相成候、依而ハ 西御丸

御焼失、其後猶又 御本丸御焼失有之、天下一統大乱と相成

申候、文久三年亥三月

御上洛有之、右ニ付、京都町々へ(拝領カ)拝銀被下置候分、如左之

御上洛ニ付、拝領銀被下置候事

大樹様 元和九癸亥年七月十三日御京着今文久三年迄 式百四十元年ニ相成

京都町人共、銀壹万貫目拝領被仰付候事

大樹様 寛永十一年甲戌七月十一日御京着今文久三年迄 式百三十年ニ相成

099-035

閏七月京都町中年寄共二条御城内へ被為召寄、柳生但馬守

御取次ニ而 公方様へ(御目見カ)御見目申上候処、但馬守殿被 仰付候ハ、(候カ)

京都町人共御上洛目出度奉存、御礼罷出候段

公方様ニも御満足被思召、就夫台徳院様御上洛之節ハ拝領銀

壹万貫目被下候得共、此度者半分ニ而御残念ニ被思召候得共、拝

領仕候様被 仰付、町人共難有奉存候事

町数六百廿五町 上京二条北かわの分  
軒数壹万七千三百廿五軒

同 五百五拾六町 下京二条南かわの分  
軒数壹万五千百拾式軒

099—036

同式拾八町 大佛外境内之分  
七百三十式軒

同百拾四町 兩本願寺地内分  
軒数千四百六拾九軒

同六町 三条寺町より東之分  
式百三拾八軒

惣軒数、合三万四千八百七拾四軒役 是ハ古書ニ有之  
儘 写し候

右五千貫目拝領銀、此数ニ割付、壹軒ニ付

銀百三拾四匁八分式厘ツ、と言

099—037

今般

大樹様 御上洛文久三亥年三月四日御京着

亥三月九日明六ツ時左京組之惣代年寄五人組

三町ツ、御召出ニ相成、則御白側ニ而結構ニ被仰渡候

御銀頂裁仕候

西御町奉行 瀧川播磨守様



東御町奉行

永井主水正様

大御目付

伊沢美作守様

099-038

御目付

大久保権右衛門様

御徒目付

伊藤次郎助様

御小人目付

彦根銀次郎様

御使

池永龜三郎様

右列座ニ而拝領被下置候

拝領金

銀五千貫目代り 金六万三千兩

099-039

公方様御上洛ニ付、京都へ金子被下候次第

二歩判  
金六千二百兩

十箱 外ニ紙包金百兩包 十包

亥三月五日

右旧例之ことく掾側江并有之、重立たる者夫々之手輿

ニ而門前ニ而車式柄(稱方)へ積

御請書

洛中町人惣代

御上洛為御祝詞洛中町人共江銀五千貫目被下候間、冥加之程難有

可奉存候、右金六万三千兩下渡候間、頂裁可致候、右之通り被仰渡金頂  
 裁仕、冥加至極難有仕合奉存候、尤割渡之義者夫々勘弁仕、相應ニ割  
 099—040

渡候様可仕候、是又其段被 仰渡候ニ付、奉畏候、依之御請書奉差上候、以上

文久三亥年三月九日 洛中惣代

洛中軒数三万七千六百拾四軒分上 壹万八千廿軒半 分下 壹万八千四拾三軒七歩

洛中町之裏借家ニ到迄、金壹兩壹分壹朱ト

五十六文 拝領仕候、難有仕合

君か代萬々歳祝候

(兩方) 南本願寺地内町々同様ニ被仰付候

文久三亥年中

諸浪人上総国片(頁方) 唄村ニ逗留致し候ニ付、関東御取締出役馬場俊藏殿

099—041

出役いたし諸浪人打取候ニ付、馬場俊藏殿取締頭ニ相成申候

浪人之触書左之通り

抑、我等者報國赤心同盟之義士ニ而身命を投し、万民困窮を免

しめん之存意、其旨趣者嘉永年間夷船来泊し、陽ニ和親を説

陰ニ國郡ヲ平吞せむ事を工ミ、交易ヲ名として威(威方)に數國を以し、此

時既ニ御打攘御廟算有之、治平連綿たる御時節柄故、一鉢之武備

未調候ニ付、仮ニ定約を結び其内講武習戦之上、御攘夷可被為有之御趣

意故、右撰戦之節ハ我輩聊微忠之志を尽さんと同盟相結罷在候處

兎角御手延ニ相成候ニ付、夷賊ハ愚民姦商を逆利ニ誘ひ皇國日々有用

之財ヲ奪、和朝有用之品を高價ニ賣イ國民困窮内患ニ生る處、不顧

愚商我慾を過し、大事ニ財を夷国交易天下有用之財ハ半年ニ倍

し貧民之苦ヲ以、不察ニ付、重任官人賄賂ニ魂ヲ失候事、尤甚し、仍而忠義

099—042

之武士共為役之命を落し恥をしる之輩ハ病と称し役を辞し、於茲

國主大名ハ自国防御等ヲ專一与して帰国せしに

御公儀様愈御手薄ニ相成候ニ付、慷慨之武士國々黨を結び、何組コウカイ〳〵与称し

邪正を正し、皇國之汚辱ヲ一洗せん事ヲ希所、江府新徴組・水戸誠信組マツ

我輩之真忠組等之名を偽、在町江押入、強盜なし、悪黨共人民ヲ轟し□倒

するより人氣自然与騒立候ニ付、農民ハ米穀を困ひ、市人ハ金銀を貯ておのづ

から融通相滞、貧人マヤヲ益々貧ニ苦ミ実ニ父子・兄弟離散し、只々凍餓とうか

する時、尤近し、我々同盟之輩ハ身命ヲ奉 公儀へ差上、乍不及

夷賊ヲ討て皇國之災之根本を断ん事ヲ旨とす、然ハ悪黨共先達而災

を下民ニ下し候之条可免甚し、先手始、彼之悪賊ヲ討て近郷隣村之患

ヲ除可申もの也、若右様之者有之候ハ、其者留置、我等旅宿へ為知可申  
克々真偽相糺し、江戸・水戸両組頭分江問合、宿在難義ニ不相成様取計方  
可致、此段承知可致事、右之趣寄場村江写置、本紙之末ニ継紙いたし

099-043

次寄場へ刻付ヲ以順達可致、但し寄場村ハ写ヲ以、是又刻付ヲ以、組合村々直様  
触廻し、小前末々迄、不洩様、村役人より能々可被申聞事

真忠組之義士

松本熊太郎組

房総組支配

三浦帶刀 有國 花押

文久三亥年十二月日

同セ話方

楠 音次郎 正光 花押

小関村

新開 片貝村 大小  
當分旅宿 寄場 惣 代中

右浪人共村々江廻文相触候二付、村々継立之處、御注進、櫛の者を引か如し、是ニよつて板倉内膳止  
上総国東金御陣屋ニ御出役被遊、右浪人共召捕ニ相成候

099-044

板倉内膳正様御召捕候分

楠音次郎正光外六人召捕

加納遠江守様御召捕候分

三浦帶刀有國外五人生捕

御取締御出役

廣瀬様御召捕候分

里見忠次郎外三人召捕

同

馬場俊藏様御召捕候分

加藤額之助正直外七人生捕

099-045

右召捕候浪人東金町二而御吟味有之候ニ付、御出役之人数左之如し

堀田鴻之丞様

上下凡三百人

板倉内膳正様之御人数

上下凡四百人

加納遠江守様

上下凡六十人

松平豊後守様

上下凡九十人

御代官

中山誠一郎様

御勘定吟味役

石原順之助様

畑 菊太郎様

099-046

御取締御出役

馬場俊蔵様

外五人

右道案内之者凡九十人二而内々御尋

右之人数東金町へ御出役被遊、内々御吟味御座候、引合等二相成候村々凡式百三十ヶ村計猶御調之上追々被召捕候、其後元治元年子ノ四月日光山御参詣ニ付、又々浪人共

押来り、水戸殿御用与して常州筑波山、野州大平山ニ諸浪人籠り、此近在所々へ

押入、武具・馬具奪取、当村組合内寺岡村礼吉・藤松方へ浪人共止宿いたし

多田木村、分部仁兵衛方ニ而馬具壹組・刀壹腰献上致す、同染右衛門方ニ而馬具壹組

献上致ス、八柵村徳兵衛方ニ而馬具ばぐ馬具巻組献上、北猿田村ニ而金子百五十兩献上ス、山川村ニ而

金百兩大月村ニ而百兩大沼田村組合拾三ヶ村ニ而大小惣(大小惣代之者也)之者寺岡村へ被寄出、御見舞ニ不罷

出旨之御了解被仰聞、右拾三ヶ村ニ而人足七十人・馬三十疋被仰付、右寺岡村今大平山迄

寺岡村へ罷越候浪人、大将正木入道春應与申者也、栃木町合戦ス、大将田中源藏

099—047

同六月朔日結城町へ押来、結城御陣屋ニ而金子壹万五千兩奪取、栃木町へ押入、右

合戦ス、右町焼拂ふ、此邊分も浪人ニ組いたし候者多分ニ有之候、大前御代官青木

七左衛門(マ)俣兩人浪人ニ相成、西岡郡之助与改名致し、四十人之大将と成

田沼玄番頭殿惣大将として諸浪人討取、十一月諸浪人はへ軍ス、梁田宿へ

泊り、其時足利町大騒キ致ス、當村坂ニ而たへ松付人足七、八百人ニ而ふせぐ

夫与り諸浪人加賀様へかふさんすると成

長州浪人数多出来、江戸ニおゐて長州様御屋敷打こはす、夫ニ付、毛利

京都ニ而合戦有之、長州様未夕和ぼく無之候

此時水戸様長州様むほんをおこし諸浪人ヲ出ス、天下大乱する

江戸ニおゐて所々ニ木戸立、関所之御印鑑無之候而者通行不相成候、兵歩

人足屋敷九段へ立、西御丸下ニ立、其外所々ニ立

099—048

諸浪人之大将には

大将 武田香雲齋 是ハ筑波山惣大将也

同 田丸稻右工門 是ハ大平山大将也

同 田中源藏 是ハ野州栃木町へ押込候大将也

同 政木入道春應 是ハ寺岡村礼吉店へ罷越

近村へ参り、運軍用金

勸め取申候、近村今浪人

とも数多出来申候

099—049

同 西岡郡之助 是ハ大前村御代官之子息也

筑波山合戦ニ而討死仕候

099—050

元治元年子、諸大名様奥方御国元へ引取、依之長州・萩之城主松平大膳太夫様何歟  
御立腹ニ而江戸表御屋敷不残引取申候處

御公儀様御立腹被遊、御老中・御若年寄・御側衆其外御役々様方於

御評議有之、右大膳太夫捨置候而者、外々大名猶又我儘申候様相成候間、難捨

置段、諸役人申之候ニ付、一統御評議之上、長州松平大膳太夫様御屋敷江戸丸ノ内

桜田御門外ニ有之候長州御屋敷江戸中之御火消組ヲ集メ、右御屋敷打こ



かわし申候、依之猶々長州様京都へ参り天子様ヲ取拵へ徳川將軍

御上洛可致旨從 天朝御沙汰ニ付 早々御上洛被為在候

依之京都大混雜ニ御座候、 又候御大名様京都へ御参内有之候者も

御座候、又者御国元へ引取候御方も有之候

奥州・會津之御城(主) 京都御詰番ニ御座候得共、京都大混雜ニ付、會津様大キに

099-051

御心配被為在候、依之 京都ニおゐて 諸大名方并ニ

御公家様方惣御評定ニ而 長州御進發被 仰出候、依而公方様江戸

御城ニ御帰城被為在候而從是諸役人惣御登 城ニ而評儀決定仕、且又御進發

之御用意御座候、 諸御簾本方御供被 仰付、御簾本 (簾本二字アリ) 知行之百姓方へ

歩役御用金等被 (天) 仰付、但シ百石ニ付、金三兩又者金七兩位にて被仰付候

依之公方様大坂表迄御出馬被遊候、御先手方ハ長州之國境迄参り申候

公方様京都ニおゐて御難題被 仰付 (御去カ) 横濱打拂へ長州相拂へ之義ハ御沙汰無之、依而

公方様御心配被為在、大坂城ニ而御推去被為遊候、 一ツ橋大納言様公方様ニ

被仰出候處、諸大名方一ツ橋様不帰依之義ニ而天下大乱と成

099-052

勅書御受書之写、奏聞之条、御所令下札

ヲ以被 (御奉拜見カ) 仰出候ニ付、御請書奉拜見被仰付、銘々

厚相心得可申旨被 仰出候事

幕府之義、内ハ皇國を治安セしめ外ハ夷狂を征伐可致職黨(黨)

之処、泰平打續ヲ遊情(情)ニ流れ、外夷驕暴萬民不安、終ニ今日之形勢

とも相成候事故、癸丑年以來深被腦叢慮(慮)、是迄種々被 仰出候義も

有之候處、此度 大樹上洛、列藩与り國是之建議も有之候間、別

段之聖慮ヲ以、先達幕府へ一切御番任被遊候事故、以來政全(令力)一途二

出、人心疑惑を不生候様被遊 浅思召候、就而者別紙之通り相心得、急度職

掌相立候様可致事

但シ国家之大政大義者可遂奏聞事

右聖旨之趣護(護)而奉畏候、臣家も不有難任其任候へ共、盡精力職黨(掌力)

相立候様、勉勵可仕候、此段御請奉申上候、 家茂

099—053

御請

横濱之義ハ是非共鎖港之成功可有奏上候事

但シ先達而被 仰出候通り無謀之攘夷者勿論致間敷候事

一、海岸防御等之義ハ急務專一二相心得、実備可致候事

一、長州聖道(所原力)之儀者藤原実美以下脱大工(脱走力)之面々者并宰相之幕臣ニ到迄(幕臣力)

一切朝廷与り御差図ハ不被遊候間、御委任之廉ヲ以、十分見込之通り聖道(所原力)

可致候事

但シ先達而被 仰出候奉御旨意、(所置カ)聖置可致事

方今必用之諸品高價ニ付、萬民難決不忍次第、早く致勘弁、人心

折合之聖置(所置カ)可致事

前數之条々鎮而奉畏候、横濱之義ハ不及申、海防筋ニ於ても

099-054

肺肝を聴(卷)キ叡慮遵奉之微忠可相盡奉存候、長州之義ハ

猶又別段御沙汰之次第も被為有候ニ付、(寛大)賽太を旨として

至当之聖道(所置カ)可仕、此段奉申上候

丑四月 家茂

御請

奏聞之条々御所与り下札ヲ以、被 仰出候御請書

昨年中

御沙汰之趣も御座候付、別段譯ヲ以、當子年今年々々千

俵宛神宮へ御供料御僧加可仕事(増)

朱書下札

格別之事ニ付、(現)硯米貳千石御僧加之事(増)

099-055

一、闕字畫等之義始、命條（令カ）可相守、海内布告之事

一、御誕辰六月十四日仕置致間敷事

一、仁孝天皇御忌日六日、新朝手門院（新朝平門院カ）御忌日十三日

右例月相心得可有之、海内布告事

朱書下札

幕府精進日之通、可心得事

一、大樹代替り、將軍宣下之後、為御禮上洛可仕事

但シ十七才以下、名代ヲ以御禮申上、十七歳ニ相成候ハ、

上洛可致事

099-1056

朱書下札

書面之通り

一、三家始、万石以上之面々家督官位之御禮与して

可致上洛事

但シ十七歳以下者名代ヲ以、先御禮申上、十七歳ニ相成候ハ、

上洛御礼可申上候事

一、西國大名関東へ往來之義、伺天氣、勝手たるべき事

朱書下札

諸大名山城往來之節、可伺天氣候事

但シ滯京之義ハ不可限十日之事

099—057

一、 國務是迄之通り惣而御委任之事、尤國家之大事(件カ)許者伺 叡慮取  
計之事

朱書下札

昨年御沙汰有之候通り、御委任之義今更被 仰出候迄ニ無之候、但シ

君臣上下之名義ヲ正し、末々迄恭順之意相貫、書付

数(類カ)、瑣細東之義迄も心得違無之様可有之事

一、 朝廷御忌日、重罪ハ勿論輕罪之者仕置申問敷事

一、 九門御警衛万石以下三千石以上之者へ可申付事

朱書下札

万石以上之者へ可申付事

099—058

一、 諸社行事之事 但シ 山城之國內不通之場所(連カ)ニ而春秋兩度ニ

御定置、兼而被仰出諸人難義いたし

不申様御手輕ニ奉願候事

朱書下札

尚、追々可被 仰出候事

一、諸大名國産之内(備欠)二候処、年々貢獻可有之事

但シ諸侯疲弊之折柄二候得共申合、五ヶ年目

手輕之産物以使者、所司代へ被差出、貢獻

可致事

書面之通り、但シ武備へ所司代(備)日限相伺、武

備(備)之差圖之上、其面々々奏者所へ可差出候事

099-059

一、親王、丞相薨去於朝廷(廢朝)之御方二ハ海内鳴物停止之事

朱書下札

但シ 日数於親王、丞相可為三家三郷之通り、於

傳奏・儀奏(議奏)兩役も 停止日数等惣而

可及孝中之通り事、是迄幕府親族(為老)

死去之節、以企當黨備取計被 止物音(勾當掌侍)

候へ共、以來其儀令止事候事(惣)

一、 宜秋門邊御取廣相成候 共 可仕事(操)

但シ 禁中(曆面)之宜秋門者西方ハ□□大將軍之

凶方二付、當年者御見合、来ル丑年又ハ寅年

吉月良辰相撰取懸り可申事

099-060

一、御築地東西之通り御取廣御花畑仙洞故院御取繕之事

一、泉浦寺御掃除筋御手入等精々入念候様、猶又可申付事

一、禁中御糧(通カ)向御改革向、入念候様可申付事

一、皇子皇女可成丈御法體不為成候様可仕事

但シ 御永續之良法篤与評儀(マ)之上可申上事

下札之外箇条各々可為書面之事

今度

奏聞仕候十八ヶ条之書面、下札ヲ以、御沙汰御座候趣、逐一奉

畏候、尤諸事朝廷尊奉之通り(通カ)を尽し度、誠意与り

申上候件々ニ付、八ヶ条之御下札之趣ハ暗合之筋ニも有之、別而

不都合無之様可仕候

元治元年四月廿九日

慶喜

099-061

直克

忠  (通カ)

忠精

長州御進發ニ付、毛利様令

京都へ差上候歎願

正邦

長州上書

臣始、奉勅命上者為陛下者天下萬民之困窮ヲ救ん存、追々弧刀

ヲ以、醜夷を退シ肺肝ヲ〔碎〕キ周旋仕候処、豈〔豈國らんカ〕ん大樹之暗弱諸吏之姦一却〔邪〕二而、去八月以來天〔疑〕を蒙 風闕之守衛を御除、剩正元者奸計勤王藩を反問いたし

099-062

品々讒之奏を以、遠さけ害〔害〕シ、醜夷之〔開闢〕□ひ天朝開闕以來大禍ヲ釀萬民困窮塗炭に陥候へ旨、見るにたへず、去年以來身命〔抛力〕□て蛮奴打取候義、既ニ達天魔〔魔〕候通ニ御座候、聊臣か微忠之〔敬力〕数念内奏改さんため

老臣共上京為致候處、是又正元之差圖ニ而通路を固メ壹人も上京不相成

老臣共不堪憤怒ニ出先取計ヲ以、不憚天朝、御所近ク會藩与争戦及、洛中

焼亡之罪不少、右之次第より□天責相増、既ニ諸藩討長之嚴命下候趣〔不火力〕恐懼之至り、忠儀却而不忠成奸臣賊子之國を誤候儀、古今〔不火力〕玆候へ共も〔ママ〕朝迄家運之衰ひ候者歟、此上者いさき能、國乱ヲ蒙与覚悟仕存せ、廷之〔前〕聖斷奉仰候共、去二而も國仇之〔ママ〕万分一ヲ報し、陛下之御悋念万分一ヲ晴〔ママ〕シ周塞候ハ、上ハ先帝之高恩与不地目下モ臣下之職分□不辱〔縮物〕して



肝有合せ、依之領内有志之輩与不日横濱湊へ押寄物怪(物怪)之勇ヲ振ひ府物を蒙可申、臣父子滅亡之後事を觀覽、臣等忠歟聖察被為在候様奉願上候、恐惶謹言

元治元年九月 日

099—063

長防(志)□之大守

正四位藤原朝臣

五月三日有栖川宮へ指上候處、(即カ)良日御 参内奏聞被成候處、今上龍顔ニ御涙を浮ツ何ぞ大夫か忠義ヲ知らさらんや、朕不明にして此書を見るに觀聞有之親ら筆を給ふ

朕寐食□不忘汝忠儀也唯□奸臣之

猖獗不得已也□藤房正成忍憤以待時

之至天下一日不行可有無汝也朕所□

勿怠勿誤

武田伊賀守始、歎願書之写

私共多人數引率、是迄罷登候次第、先般以書取ヲ奉歎願候通り、聊099—064

素意上達し(イ)仕度趣意も御座候處、何分當時之身分柄ニ落入候上者願書等

御取上難相成段被仰渡候、然る上ハ時実<sup>(申)</sup>之行違分移来候義と者乍恐<sup>(申)</sup>公邊へ

御人数へ打合候義も有之、殊ニ軍將ニ而是迄潜行致、諸<sup>(候)</sup>為致動揺

候段、実ニ天下之御大法犯シ不相濟義恐入際伏仕候、何卒此儀可然被<sup>(如何)</sup>仰立

女何ニも被仰付候様、伏而奉願上候、右様言上仕候上ハ素分決死罷在候儀、抑

彼是申立候筋無之候得共、只々先般奉願上候通り如斯成来候<sup>(申)</sup>情ハ実ニ其

謂も御座候事ニ而曾奉對 公邊へ御後闇意念を懷キ、大不敬ニ挙動

相働候儀ハ無御座候處、今更空敷流賊之傳名ヲ蒙り候様ニ而者手載之後

死而迷憾<sup>(遺憾)</sup>義ニ御座候間、武門之情、此段ハ尊藩ニ於而も別而酌取、急度御<sup>(弁)</sup>

解被 成下候様奉願上候、決死之一語他ニ申立候義無御座候、以上

元治元十一月 日

武田伊賀守

加賀中納言殿内

正生 判

永原甚七郎殿

099—065

是より浪人共関東取締ニ而追々召捕、逸々御調之上、首刎候次第、此時米壹両ニ

四斗弍升、諸浪人常州築波山ニたてこもり、諸々乱入いたし候<sup>(マ)</sup>

野州大平山ニもたてこもり水戸之城下へ参り大戦合いたし、水戸より

落来り田沼へ罷越、出流原・赤見・寺岡・川崎・八木宿へ泊り、大田それより

加州之方落行、加賀様へ際参仕候、それより首ヲ刎候始末、左之通り<sup>(降参)</sup>

水戸殿

御書院番頭

彦右衛門隠居

武田伊賀

同 彦右衛門

右伊賀次男

同 魁助

其方共義、元同藩市川三左衛門等申立候趣、主家ニおゐて採用相成候ては

同藩結城寅壽之存意貫キ、家政取乱事様可相成存迫り(マツ)訴致段は(松カ)

099—066

主家之為筋存仕成心得ニ有とも、慎中之身分、下総国小金原等迫出張、追々

同士之者共鎮静として出張いたし、松平大炊ヲ申欺、随従いたし、城内

へ可立入旨仕成、其上常州那珂湊其外所々暴行し、御討手并主家(敵カ)へ欺對、主(主家カ)

縁邊江相使可申与軍装ヲ以、所々横行、國々動乱為致、農民ヲ悩ス段、御大法を

犯し、不容易所業ニおよひ始末、不恐公儀ヲ仕方、重々不届至極ニ付、嚴科にも

可被決之處、追而右之次第恐入義与心附、加州勢(陸)へ際伏いたし候ニ付、格別之御宥免ヲ以、斬罪申付候もの也

小性頭取

山國涼一郎(遊)隠居

山國兵部

其方義常州築波山賊徒攘夷を口実ニ設ケ、野州大平山等へ頓集致ニ付  
鎮靜方与し申付候處、却而賊徒共へ同意いたし又ハ同藩市川三左衛門

等申立候趣、主家ニおゐて採用相成てハ主人為筋ニ相成間敷与心得、其儘差置

099-067

かたく存込折柄、松平大炊より頼受んとて、隱居慎申請身分、付添歩行  
武田伊賀等へ随從暴行、其上主家縁邊へ可使与軍裝ヲ以所々横行、國々  
動乱為致農民ヲ惱段、御大法ヲ犯し不容易所業およひ候始末前同断

右

山國淳一郎

其方義故左衛門尉位牌へ付添、水戸表へ罷越、余中戰爭中ニ而市川三左衛門等ニ  
軍勢ヲ相決、城下へ<sup>(強方)</sup>立入段ハ無余儀次第有之候共、松平大炊一同ニ相成、其上右  
位牌榊原新右衛門<sup>(左)</sup>へ引渡上ハ立戻其段可申立之處、武田伊賀へ隨從、親兵部  
供々御討手并主家へ敵對いたし、其上主家縁邊へ可使与軍裝ヲ以、所々横  
行、國々動乱為致農民ヲ惱段、御大法犯し不容易所業ニおよひ候始末前  
同断

先手物頭

長谷川道之助

使番代官

村嶋万次郎

099-068

小十人目付

井田周備(因幡之)

朝倉□正(備)

表右筆

川瀬専藏

其方共義、其筋分申付候處、御大法ヲ犯し候段、不届ニ付始末前同断

御側用人

小野□男(筑)

伊藤健藏

大番頭

山形半六

岸新藏

099-069

目付同心

小栗弥市

町同心

川上清次郎

竹田万治郎

大宮村百姓

内藤昇一郎

其方共義、御大法犯し候段、不届ニ付、依而死罪申付もの也

丑二月四日

皇国之尊キ御恩報るに天照御神へ額面を奉りて

霧の丸東棧敷へ御見物

南盛

武の目貫賢蛇ニ養へ龍小柄

細越

君恩はされ共忘れつ 茗荷<sup>メウカ</sup>たけ

松肥

099-070

蠟燭の辛か堅くて能 保ち

松肥

米澤も博多も□与丈夫むき

上黒

橘は仇二者 咲ぬ、親のあと

近彦

藍玉はよもやすほふニ交る まひ

鳴戸

酒か出て座ヲ治るや浪しつか

羽庄

奥菌に物のはさまれし干大根

尾濃

沈しにも不免妨憐の大茶わん

廣嶋

早羽をのさせ見たし雀の子

北国若殿

菅家子の旅は取あへすちと不出来

北海

頼子の大坂籤はつきがかけ

一藩

両国て豊前太夫とへこむとも

小倉

茲までも錦をかさる萩の花

三星

099-071

見競てかすりのかたを取る上布

鬢太

鯉節は古見出しに遣ハれす

土高

水の手か足らてしめせぬ杓之

磔川

蝶惑丸借りてむかひ

因備

むくりては役にはたゝぬ皮かむり

越春

短いふんどし上方の尻へしめ

勢桑

花桐の香は吹廻す風次第

今上

油断のならぬかわ□落合の先

落卿

軸

孫からいさをし見ゆる松乃根

子八月 許

099-072

四海波にへくりかへり暑 かな

思ふようにはならぬ風鈴

出る入る代りく／＼にけふの 月

糸分細く鳴虫の 聲

今度の堪忍袋綱（繻丸）をしめた

むけし（む）に帰る御代乃うれしき

葉によき浮世頼ん放し鳥

何につけても金のほしさよ

喰込て己か身ヲ喰きりく／＼す

程なき事を配る□き□になす

判者

霧城

魚清（林ふり）

博下（并日）

萬民（讀人不知）

若家（上ふ）

天草

野州浪

同下手

099-073

能種乃花はます盛 なり

飛鳥（ならむ方）□しむ巢籠の禽

天下大麥小倉ケンノン不運長州

教師（講武）



此度は敵も留あいつ手ぬけ山

三家

毛利の顔色見てもますく

此度、浮浪人共常州筑波山ニ立籠り、数度合戦仕候処、追々打まけ、常州  
今野州へ罷越、田沼・赤見・寺岡・川崎之渡船ヲ通り梁田宿・八木宿・大田町木崎  
それ今上州沼田越へ越後・加賀へ際伏、(降)此時馬籠印、左之通り

奉 敕

此幟先陣ニ押立

物頭壹人

重立百五十人

0991074

此幟印者筑波山ニ

立籠り候浪人共

加州へ降参之時

八木宿・梁田宿ヲ

通行之節

如此

報 国

同式陣物頭壹人

重立百五十人

天

同三陣物頭三人 天勇添組と唱ひ候兵士式百人

地

同四陣右同断兵士式百人

人

同五陣前同断兵士貳百人

龍

同六陣前同断重兵士貳百人

何れも白あや鉢巻後へ  
結び下ケ

兜

同七陣前同断 貳百人

日  
○

此陣ニ田丸稲衛門兵士  
貳百人 召連罷在候

此陣ニ武田伊賀守兵士六百入



召連罷在候

次 正武際組(陸)

次 歌兵際組(騎兵隊) 前同断之趣ニ而加賀へ罷通り候間、打取可申

与公儀役人一同手配ヲいたし、御固メ候人数左之通り

江州彦根分御人数差出し、浪人手配之次第

越前之国今庄之宿分式厘(里)西若州海邊通り式ツ井村分

明原村新田、右三ヶ所浪士立入候趣ニ而、出陣之者左之通り

099-076

里瀬郡出陣、彦根家中

木俣 土佐

三千人召連候

壹厘程間有之大谷村

松平越中守家中

宮崎傳之丞

外四千人召連候

同断、郡山甲斐守家中

貳千人召連候

若州津留加浦二而

越中守家中

松本佐重郎

休徳小平太

七千人召連候

壹厘程先二而大久保加賀守家中

陣代

辻七兵衛

千五百人召連候

099-077

式厘程之内若州小濱殿

三千人召連候

會津殿

千五百人召連候

一ツ橋殿

千五百人召連候

右、御人数十二月十四日御改御見分、弥十六日討取之積り、翌十五日大雪ニ而戦ニ不相成、其内越前通り仕加州へ際参(參)いたし候よし

關東御取締出役木村機藏(機藏)殿常州ニ而浪人召捕

口書取、首ヲ勿候次第、口書之写

099-078

一、私共際參(際參)ニ罷出候始末御吟味ニ御座候

此段申上候、榊原新右衛門・谷鉄藏・富田三保之助名前之者追々轉役又ハ

部屋住等迄、當役相休罷(休)在在候処、(二字スケカ)年 結城寅次郎不容易肝(肝要カ)要所業

有之ニ付、手仕置被申付、其餘(後膽カ)□□之者交人数有之候得共、寛太思(マ)召

ニ而再採用有之間敷義ニ而私共鎮列罷在候處、諸生組市川三左衛門外

式人取計向ニ事寄三百人余召連出府いたし、政躰向変革

之義御中へ触出し、右殘黨共相用ひ領内一統騒立廻り、贈大納言殿

御遺言ヲ相背、御為筋不相成候間、変革殘黨共採用之義御沙汰止シ(マ)相成候

様銘々為歎願六月下旬七月下旬ヲ追々國元發足致候事、途中

御閑所へ印鑑不相廻シ居通行いたし兼候ニ付、新宿・金町・松戸・小金辺

多人数滯留罷在候、尤出府致候ものも有之二付、國元(勅攝鎮靜カ)動採鎮剩之義

中納言殿為名代、松平大炊守殿(前)被申付、私共一同付添被申付、八月三日

江戸出立、同十三日領内藥光院參着仕候、城入之義申入候処、城中より

鎮木石見守(前)從者六人者宜敷候得共、多人数之義難相成旨申置、立歸り

099-079

其後何等之義有之候哉、猥ニ及放發候ニ付、有合候道具を以相防候へ共、此処ニ而ハ

城入弁利も不宜敷与存、磯之濱へ參り、少々人数屯罷在候ヲ追退ケ、此所人数

残し置、新右衛門(前)・三保之助等少勢ニ而神勢館參り大番頭飯田庄藏ヲ以、鎮撫之

儀ニ付、城入之儀申入候処、却而庄藏留置候ニ付、磯之濱へ立戻、人数召連神勢

館へ出張いたし、猶嚴敷放發被及不得止事、戰爭いたし候へ共、素令

要害之地ニも不有之、宜敷亡命致候茂殘念ニおよひ那河湊(河)ニ退陣仕、其

後数度戰候へ共、全諸生方又ハ郷中百姓而已心得居候処、大炊守并鳥居瀬(頭)

平・大久保甚五左衛門參拾人召連、御目付戸田五助殿被申越候ニ者大炊守其外江戸(前)

表へ御差立相成候間、此方与り御放發不致候間、可致神明之趣(妙)ニ付、矢文之往復等有之、相鎮罷在候処、誰之評所(陣)とも不相知、類ニ及放發候ニ付、誰殿陣所哉何故無法ニ放發いたし候哉承り度旨矢文思矢ニ結付、陣所へ討込候處、同返書を矢ニ結付討返し候付、取上披見候處、只以公命を討大朝(敵方)与有之、当惑致居候処、猶、五助殿より放發ハ不致趣ニ而戦者勿論何卒 公儀の御印有之馬印・幟差物等見請候ハ、陣所へ罷出、赤心之義を申述度存候得とも  
099—080

夫も不相知歟、然ル處、十月十九日夜兵歩頭平岡四郎兵衛殿・鎮木良太郎殿(録)分

新右衛門・三保之助へ竊ニ面談いたし度被申越候へとも、新左衛門輕義有之(孫我)

三保之助ハ病氣ニ而其夜面談不致、翌廿日夜三保之助病氣少々単論仕候ニ付(平癒)

陣所へ罷越候処、田沼玄蕃頭殿御内意之儀も有之、一ト廉之切ヲ立候ハ、際參(陣參)

差許べく旨御合印等も御渡しニ相成候ニ付、一同幸之事と奉存、同廿一日曉

相圖ヲ定、湊四ヶ所へ放火いたし、福地政二郎ハ一手ヲ以、半車櫓へ放火いたし(反射妙)

猶、一同同意違之もの逃行候ヲ追掛候へとも、最早逃散候ニ付、引居御人数

加り候処、水戸家へ御引渡しニ相成候義ニ而脱刀可致趣、左候而者、何様之取計(御)

請候哉も難計、脱刀致兼候ニ付、公儀之御裁数ヲ相願度、然上ハ脱刀ハ勿論鎖

御裁判奉請候趣申候処、私共始、諸士以上小者ニ到込、都合四百六拾三人堀田相模守殿御家来へ御預ケ相成候義ニ而 公儀之御敵對致候心底、聊無御座候

候へとも、不慮之場合与り事發り、右之次第二相成候段ハ奉恐入候義ニ御座候、右申上通り少茂相違不申上候  
以上

正月十一日 從 甲 府 駅

099—081

田沼玄蕃頭様宿繼ヲ以來ル

今般御仕置申付候賊徒之内、武田伊賀・山岡兵部・田丸稻右衛門・藤田小四郎

三ツ木左太夫首級、水戸殿へ可引渡旨、被 仰越候処、三ツ木左太夫ハ越前國今

庄ニ而脱走致候由ニ而際伏之内不罷在、其外四人御仕置之義、黒川近江守・瀧

沢喜多郎相伺候ニ付、夫々嚴科ニも可被官所之處、際伏致候廉ヲ以、伊賀

外式人ハ斬罪、小四郎ハ死罪与差圖之上、御仕置相濟、首級ハ塩詰ニいたし

關東取締出役差添、中山道筋板橋宿差立、右首級同宿へ預置、關

東取締出役井上信濃守殿へ為申立候間、請取之者同宿へ水戸殿与り 御差出

有之様御達可被下候、依之此段申達候、以上

丑二月五日

田沼玄蕃頭

猶、本文伊賀外式人ハ斬罪、小四郎ハ死罪申付、死體ハ取捨、首級而已水戸殿引渡

099—82

申候、且又稻右衛門ハ変名被達候間、此段御心得与して申達候、以上  
右之趣ニテ常州筑波山引取、段々迭行、加州殿へ際参（註）いたし候、是ハ扱置  
長州御進發被 仰出候儀

慶應元丑年

御進發

公方様

大坂迄御出馬  
其外御大名御供之面々左二印申候

長州御進發ニ而公方様大坂迄御出馬相成候處、公方様義大坂ニおゐて御病死致候ニ付、御進發之人数  
御陣拂ニ相成、夫々一ツ橋様將軍と相成 御上洛仕候處、公方職返状仕、却而

一ツ橋様

追討相成申候

099-083

御老中

御勘定奉行

奥御右筆組頭

松平伯耆守

井上信濃守

佐山八十次郎

阿部豊後守

御目付  
小笠原棋津守

片山与八郎

松前伊豆守

木村兵庫守（題）

奥御右筆衆  
中嶋彦四郎

外三人

御若年寄

御小性頭取

酒井飛驒守

諏訪安房守

御進發御宿割



御側衆

御小納戸頭取

高二百表  
井上信濃守

竹本隼人

須田淡路守

御目付

坪内河内守

野田下総守

小俣稲太郎  
同御歩目付衆

村松出羽守

服部加賀守

榊原栄太郎

大御目付

溝口能登守

五人

神保佐渡守

御小納戸  
大久保隠岐守

黒川近江守

宇田川平七

099-084

御取締役

剣術師範役

槍術師範役

百表十人  
神谷保三郎

今堀千五百藏

三百表  
加藤平九郎

外五人

伊庭軍兵衛

二百表  
駒井志津磨

同調方衆

三ツ橋虎藏

百表  
勝与八郎

大原四郎左衛門

湊信八郎

杉浦藤馬

外十式人

同教授方

御武具奉行

戸田三郎兵衛

同教授方

松下誠一郎

外九人

二百表  
平岩為三郎

剣術師範役

同世話心得

外五人

榊原鍵吉 三百表

堀七之輔 五百石

同世話方

外八人

竹内新五郎

外十四人

099-085

御小人目付衆

羽田六藏

御若年寄

講武所御奉行

池谷金之助

二万廿一石 美濃苗木城主

遠山信濃守 一万七千石

遠藤但馬守

外十式人

土岐山城守 三万五千石 上州沼田城主

渡辺甲斐守 三千石

御進發御供御役人

立花出雲守 一万石 奥州下手渡城主

同頭取

御老中

増山對馬守 二万石 參州長嶋城主

一色半左衛門 三百表

松平伯耆守 七万石 丹波宮津城主

御側衆

佐久間真輔

阿部豊後守 十萬石 奥州白河城主

村松出羽守 五千石 高三千石

伴野七之輔

松前伊豆守 三萬石 松前福山城主

竹本集人正 五百石 (集)

國領市太郎

松平周防守 六万四千石 下野宇津籠(喜城)城主

酒井壹岐守 五千石

秩父栄橘

赤松左衛門尉 三千五百石

伊東哲之助

099-086

砲術師範役

(銃練方)  
鏡鍊太鼓

陸軍奉行組頭

飯田庄藏 三百表

金子甚三郎

藤田弥輔

榊原鏡二郎

関根熊藏

外式人

吉田直太郎

千人頭八王子住居同心四百人

同調役

四百石  
窪田喜八郎

天野柳藏

同教授方

原 嘉藤次

村田鍵之助

堀 岩太郎

石坂弥次右衛門

外十九人

外五人

萩原頼母

歩兵御奉行

同世話方

陸軍奉行

二千二百石  
河野伊与守

本間忠左衛門

五千石  
竹中丹後守

千七百石  
小出播摩守

外三十壹人

二千石  
溝口伊勢守

同頭

大砲教授方

三百石  
宮永相模守

筒井於鬼吉

外三人

099 | 087

歩兵頭

歩兵差圖役頭取

騎兵差圖役頭取

三千五百石  
久世下野守

福王金三郎

成瀬善四郎

千五百石  
戸田肥後守

外三十五人

外八人

三百表  
平岡越中守

同差圖役

同差圖役

城 織部

野々山丞五郎

鶯殿十郎左衛門

徳山綱太郎

外七十八人

外五人

森川莊二郎

同下役改役兼帯

同下役旗役兼帯

岡田佐市郎

岡 勇左衛門

所 多一郎

深津弥左衛門

外五人

御持小筒組頭

井上啓二郎

同旗行(奉欠力)

松平信濃守五千石

都筑鎌太郎

渡辺力三郎

大平鑛次郎二百表

朝比奈織之丞

外五人

天野帰一百五十表

騎兵頭 貴志大隅守

六百石 山角儀之助

0991088

御持小筒差圖役頭取

大御番頭八千石

御書院番頭三千石

松下隣之輔

斎藤撰津守一万二千石

柴田越前守

外十人

米倉丹後守

長谷川平兵衛組頭

大砲組頭

御書院御番頭

同

成頼對馬守五百石

本多日向守四千六十石

八木但馬守四千石

佐久間幡五郎八百石

神田主馬組頭

中嶋内匠組頭

高尾惣十郎五百石

同

同差圖役頭取

太田筑前守

間宮鉄太郎

真田造二郎組頭

外十人

是八當村殿様

同差圖役

大坂表二而御暇給り

野田子三郎

婦府仕候

河野信二郎

同 水野伊勢守

外十八人

服部鉄之丞組頭

099-089

御小性組番頭

御小性組番頭

御勘定吟味役

井上志摩守四下石

朝倉播摩守五百石

小野友五郎

大久保原太郎組頭

御用御取次見習

星野録三郎

同

大御目付

同

嶋津伊豫守三千石

神保佐渡守九百石

高橋織之輔組頭

永井左兵衛組頭

田沢對馬守二百石

外五人

同

大久保紀伊守六千石

御勘定衆

室賀美作守五千石

駒井相模守二千七百石

森次郎七

神長右衛門組頭

塚原但馬守三百表

外廿式人

同

御勘定奉行

御陣場御奉行兼帶

酒井安房守五千石

松平對馬守

岡松伊豫守御作非奉行

組頭  
内藤鎮太郎

井上信濃守

099 | 090

御軍鑑御奉行

新御番頭

御小性頭取

木下大内記

勝田左京三千石

石谷安藝守三千五百石

石野筑前守

近藤吉太郎組頭

御小性

西御丸御留守居

岡部備中守二千石

跡部備中守

林式部少輔

伊藤五郎助組頭

池田伊豫守

新御番頭

御小性頭取

榊原主殿頭

須田久右衛門九百石

諏訪安房守四百石

依田伊賀守

鳥居弥平次組頭

野村丹後守三百石

大久保下野守

中川備中守千石

木村備後守三百石

酒井民部少輔

富永忠太郎組頭

内藤土佐守三百石

村松遠江守

池田大隅守

090 | 091

御小性

御小性

中奥御小性

諏訪甲斐守

松平兵庫頭

久永出羽守

永田駿河守

荒井伊勢守

松平伊勢守

木造肥後守

酒井備前守

関越前守

金田日向守

内藤因幡守

本郷丹後守

溝口相模守

藤井若狭守

中奥御番衆

加藤筑後守

中奥御小性

大沢主馬

松浦越中守

蜷川左衛門尉

三上半兵衛

進 佐渡守

久貝相模守

本田将監

石川近江守

土屋伊賀守

山下中務

竹本美作守

岡部加賀守

鈴木万次郎

松平采女正

稻葉紀伊守

渡辺修理

水野河内守

筒井次左衛門

099-092

中奥御番衆

御小納戸衆

御小納戸衆

向井喜八郎

宇田川平七

糸原啓之助

森 宗兵衛

河田助兵衛

杉田勝太郎

加藤右近

本月権兵衛

近藤甚左衛門

御小納戸頭取

門奈傳十郎

森柳次郎

仁田淡路守

永井内記

平岩金之丞

野田下総守

貴志鉄之進

毛受忠之丞

横山肥伊守

松平忠次郎

沼間鑛太郎

荒尾大和守

有壁銀次郎

右之外 三十八人

服部加賀守

松平九郎右衛門

御奥詰衆  
劍術方

御小納戸衆

土屋忠兵衛

伊庭軍兵衛

渡辺栄五郎

青木八太郎

外 廿八人

石川左近将監

間部季三郎

藤掛源之助

099—093

槍術方

御槍奉行同心十人ツ、

御使番衆

加藤平九郎

花房近江守

溝口官兵衛

外 廿三人

仙石播摩守

外 五十壺人ツ、

砲術方

御持筒頭与力同心五十人ツ、

御鉄炮方

吉田直次郎

松平侶之元(亮左)

田付四郎兵衛

外 七人、

曾我主水

井上左太夫

大砲方

水野主膳

御小十人頭御番衆

日向波之助

朽木大和守

廿人ツ、

外 貳人

御先手鉄炮頭

稻葉清次郎

御旗奉行

三枝左兵衛

外 三人

組頭



与力同心十五人ツ、

長滝庄次郎

斎藤佐渡守

御目付衆

外 六人

北前壱岐守

木村兵庫頭

099-094

御徒頭

中條金之助

(貼紙)

外十四人

中條金之助は高橋伊勢守泥舟・藤原

組頭

高歩山岡鐵舟・藤原古道松岡萬と

鈴木助左衛門

共に明治維新に活躍した劍豪で

外廿八人

ある、維新後金之助は静岡縣志太郡金

御納戸頭

谷牧野ヶ原開墾事業を指導す、旧

黒坂丹助

幕臣と共に此の地に土着す

外七人

今日御茶の名産地となる、其の功績

同組頭

實り金之助生存中 明治天皇

富田忠右衛門

行幸の栄に浴す。

同御納戸衆

昭和二十九年十二月一日 松岡政夫書

矢部栄之助

表御右筆組頭

外 貳人

佐久間三郎兵衛

外 貳人

099-095

御徒頭

中條金之助

外 十四人

組頭

鈴木助左衛門

外 廿八人

御納戸頭

黒坂丹 助

外 壹人

同組頭

富田忠右衛門

同御納戸衆

矢部栄之助

外 貳人

099-096

御番醫師

御腰物奉行

大平三五郎

外 貳人

同腰物方

大草三郎

外 五人

奥御右筆組頭

佐山八十次郎

外 壹人

同御右筆衆

湯浅貫一郎

外 五人

表御右筆組頭

佐久間三郎兵衛

表御右筆衆

山田録三郎

奥御儒者

小林栄太郎

奥御醫師

竹内渭川院

外 六人

奥詰醫師

岡田昌 碩

外 貳人

御馬方

奥御坊主組頭

井関正 英

霧見忠兵衛

今西宗賀

外 九人

御休息御庭之者支配

御賄方

御小道具役

倉地次郎太郎

力石勝之助

内田祐生

外 六人

御庭番

同組頭

奥坊主衆

野尻遊 作

石坂齋宮

市田栄林

外 九人

御召御馬預り

御膳所御臺所頭

肝煎坊主衆

村杭万藏

柴田八十郎

竹岡直勝

外 壹人

同組頭

外 三人

御土圭間御坊主衆

御目明

野田良久

村田原阿弥

外 十壹人

0991097

表坊主組頭

表六尺

御挑灯奉行

田中正庵

秋山幸治郎

向坂要藏

外 貳人

外 五人

表御坊主衆

御徒目付組頭

御中間頭

中村道頂

本礼助

井上新八

外 十壹人

外 壹人

御数寄屋頭

徒目付衆

御小人頭

星野隆圓

齋藤大之進

黒沢重右衛門

外 三十九人

外 壹人

同組頭

御徒押衆

御小人目付衆

佐野道嘉

山口小次郎

高橋清作

外 九人

外 十五人

同御坊主衆

黒鍬頭

御小人押衆

久野玄齋

伊藤新之助

神谷十三郎

外 六人

外 壹人

外 十壹人

099-098

御貝役

御総督

御旗本左右備

坂本清三郎

紀伊大納言様

内藤若狭守

外 壹人

紀州和歌山御城主

信州高遠御城主

御大鼓役

御進發之節

稲垣信濃守

宮川藏三郎

御簾本御先備

志州鳥羽御城主

榊原式部大輔 拾五万石

御旗本御後御備

越後高田御城主

内藤備後守 七万石

御駕籠頭

御旗本左右御備

日向岡御城主 (延岡)

山崎嘉助

松平伊賀守 五万三千石

松平丹波守 六万石

外 壹人

信州上田御城主

信州松本御城主

牧野河内守 二万五千石

右之御人数御旗本左右二付江戸

丹後田邊御城主

御掃除役

押寄申候

富沢次郎助

外 七人

御代官衆

木村董蔵

外 壹人

099-099

御進發御供奉御大名

松平越前守 三十二石三十二万石

内藤志摩守 壹万五千石

越前福井御城主

信州岩村田御城主

松平讃岐守 拾二万石

井伊掃部頭 廿五石(廿五万石)

讚岐高松御城主

江州彦根御城主

松平式部大輔

井伊兵部少輔二万石

越後与坂御城主(坂)

酒井河内守

右惣勢合八拾六万七千余騎ニ而長州萩之御城主

毛利大膳大輔(マ)殿居城へ押寄

松平彈正忠二万石

公方様之義も大坂之御城迄、御出馬披遊候處、御不

上総大田喜御城主

運ニ而大坂表ニおゐて御推去(進去)と相成申候、夫より

一ッ橋大納言殿、京都ニおゐて

公方様相城申候(成)、長州御進發之義も御止メ

諸軍勢不殘御陣拂へ

099-0100

御進發之節御留守居

酒井雅樂頭

上杉式部大輔

本多美濃守

津輕越中守

水野和泉守

溝口主膳正

田沼玄蕃守

佐竹右京大夫

酒井飛騨守

松平確堂

平岡丹波守 是迄長州御進發御供之面々

松平下総守 從是京都大乱と相成、一ツ橋殿京都ニおゐて大戦

松平刑部大輔 争有之、弥一ツ橋軍勢被追返、関東一統

酒井左工門 朝敵と相成申候、夫より諸軍勢関東へ押来り申候

南部美濃守 且又長防相固メ候人数爰に記ス也

099—101

抑、長防両国之大守之由諸(山嶽)

一平城天皇之皇子阿保親王之後胤関東

長州人数 一執権大膳太夫大江廣元十五代

十州大守贈三位

毛利右馬頭大江元就

菊桐之紋蒙 勅許被加相伴衆

高三拾六万九千石余

周防長門一圓領之居城長門阿武郡萩

江戸今二百七十里

毛利中納言輝元

慶長中 當城ニ移ル、代々領

099—102

内高三百万石余

毛利大膳太夫

嫡子 毛利長門守

周防徳山城主

四万千石 毛利淡路守

嫡子 毛利平六郎

長州府中城主

五万石 毛利左京

同 青木城主

一万石 毛利讃岐守

周防岩國城主

六万石 吉川監物

099—103

周防川棚 一万二千石 毛利将監

長門長ノ町 一万二千石 毛利大和

周防二保 一万千石 毛利豊前

長州上ノ岡 一万七千石 毛利筑前

同下ノ岡口 一万石 毛利能登

同下ノ岡口 一万二千石 毛利伊勢

周防岩國城主

五万二千 八百石 完戸玄蕃

長門出雲

三万石 毛利若狭

同濱砂(須佐力) 三万五千石 毛利内匠

周防廣瀬 二万三千石 毛利外記

長州船木城

二万石 毛利曲膳

周防山口城

二万八千石 毛利伊賀

周防山口 一万千石 益田彈正

同徳山 一万千五百石 完戸美濃

同下ノ松 一万二千石 益田右工門之助

長州鴨戸 九千八百石 桂集人

同(信濃) 八千九百三十石 国司信儂

同大崎(大崎力) 七千二百石 栗谷帯刀



周防 徳山  
一万三千石 毛利隱岐  
同 徳山  
一万三千石 福原越後

同 奥大町  
八千七百三十石 左世彈正  
同 今市  
七千六百石 清水長右衛門

099-104

萩 浦手  
九千石 益田伊豆  
同  
八千五百石 高須半七

萩 用人  
九千五百石 三浦礼平  
高九千石分五千石迄

外拾四人

同  
八千石 完戸播磨

山口軍將奉行

同  
九千九百石 益田源吾

六千石 石田河内

同  
九千二百石 浦 鞠負

同 山内丹下

同  
九千石 根来主馬

萩軍將奉行

防州 宝田  
九千五百石 堅田縫殿

六千五百石

久留女織部

高四千石分六千石迄

外 拾式人

099-105

旗 奉行  
五千四百石 白波守禮

海岸奉行

高五千石分三千石迄

四千石 兎玉三十郎

外 拾人

高四千石分二千石迄

外 貳拾三人

鉄炮奉行

九千石 曾根鞆負

使番

高九千石分六千石迄

千石以上 鹿口式部

外 拾壹人

外 拾人

弓奉行

九千石 吉田作左衛門

毛利淡路守 家臣十五人

用人八人

高九千石分五千石迄

毛利右京亮 家臣十貳人

外 七人

用人七人

099-1106

毛利讃岐守 家臣八人

用人五人

諸士以上士・千石已上、人数五百人余

六百石已上士、人数二千人

貳百石已上士、人数三千五百人

四百石以上士、人数二千人 百石以上士

人数八千人

御城附足輕人数 凡 拾壹万人

小早川足輕組

三千七百人

麻神組足輕

壹万五千人

099—107

□兵組足輕 二千七百人 女武者三万三千人

寺僧人数 一万七千人 此外名前不知者

山伏 同 一万五千人 三万四千人

力士 同 三千人

諸家倍臣・平士・足輕惣人数<sup>(略臣)</sup> 四拾八万六千人有之、異國船到来ニ付、可打拂と

存居候処、かひつて謀判人被 仰出

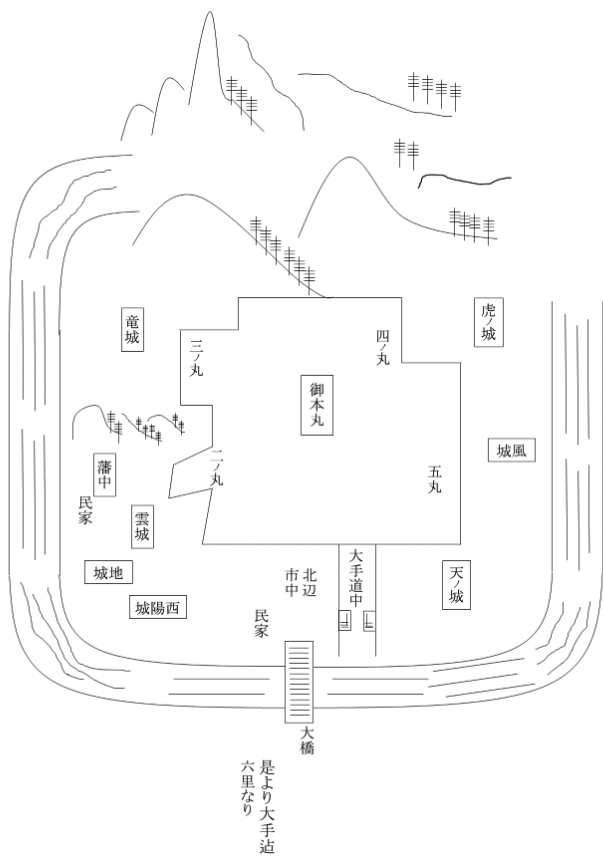
徳川將軍より長防両國之太守毛利大膳太夫可打取と御上意ニ而

諸大名其外役々之御簾本被 仰付、長州御進發相登り候、然ルニ付、長州

099—108

御備立荒増し爰に印す

長州萩城



099—109

御本丸二者御大将 毛利宰相 副将西條黄門 兵士 三万人

貳之丸二者御大将 毛利淡路 副将大沢左京 兵士 二万人

三之丸二者御大将 毛利主水 副将毛利弹正 兵士 三万人

四之丸二者御大将 完戸美濃 副将田中河内 兵士 三万人

五之丸二者御大将 吉川監物 副将森寺近江 兵士 三万人

099—110

外、廓砦

三十六ヶ所一手二大将壹人ツ、兵士三千人ツ、

外、遊軍勇士三万人 附城八ヶ所

東陽城御大将 栗尾彈正・加藤虎之助 兵士壹万人

西陽城御大将 有馬熊太郎・秋月主計 兵士二万人

天城御大将 地田源八郎・中川織部 兵士壹万人

地城御大将 山田左京・久松鐘之助 兵士壹万人

099—111

竜城之御大将 相馬鉄之助・曾我精一郎 兵士壹万人

虎城ノ御大将 千葉源三郎・吉川淳一郎 兵士壹万人

風城ノ御大将 黒川左兵衛・松川左膳 兵士壹万人

雲城ノ御大将 嶋田和之助・小出主税 兵士壹万人

長州萩之御城之備

御本丸二者御大将毛利少将、副将中山待從<sup>(侍)</sup>

兵士三万人

二ノ丸 御大将毛利讃岐、副将福原豊前

099—112

三ノ丸 御大将毛利将監、副将益田丹後 兵士二万人

四ノ丸 御大将栗尾甲斐、副将大内集人<sup>(侍)</sup> 兵士二万人

五ノ丸 御大将長岡圖書、副将有 兵士二万人

外二廓見附

十二ヶ所 壹ヶ所二大将壹人ツ、兵士三千人ツ、

長州附城

本丸大将 毛利信濃

兵士壹万人

二ノ丸大将 毛利蔵人

099—113

防州徳山

本丸大将 毛利内匠

兵士壹万人

二ノ丸大将 倉橋形部<sup>(刑部)</sup>

周防岩国城

本丸大将吉川形部(刑部)

兵士壹万人

二ノ丸大将長田安房

長門清末 御大将壹人 兵士二万人

同 船木 御大将壹人 兵士五千人

同 石田 御大将壹人 兵士五千人

099—114

同 須佐 御大将壹人 兵士壹万人

周防吉浦 御大将壹人 兵士五千人

同 和浦 御大将壹人 兵士壹万人

同 三田尻 御大将壹人 兵士壹万人

海軍 御大将・勇士共三千人

船手遊軍 御大将・勇士共百人 兵士三万人

惣人数凡五拾六万三千人、外二郷士ノ兵共数不知、長防兩國二陣ヲ取

徳川將軍人数ヲ相待居候也

是今薩州浪人出流山へ罷越、追々合戦ニ相成申候

099—115

抑、此度薩州浪人出来候而大合戦ニ相成候義ハ、慶應三卯年十一月中

江戸七曲産州嶽様御屋敷分數多之浪人罷出、江戸中大家へ之者へ夜盜押借ニ這入、金錢ヲ奪取、其上十一月中旬ニ野州出流山産州浪人

大将として會沢元助・竹之内啓、右兩人罷越、近邊百姓其外之者とも

集メニ随レへ、此邊之者とも所々レ組いたし當家親類只木村阿部

幸右衛門与申者ハ宮原撰津守領分ニ而御代官被 仰付置候處、右孝（幸カ）右衛門病死

いたし、其孫阿部榮太郎（榮太）与申者有之、此者義安蘇郡天明在堀込村与申処

聳に参り、此榮太郎義、右浪人江加り同人弟分、同只木村阿部鉄之助与申者

右兩人産州浪人与相成、出流山へ集り、右榮太郎義吉田定二郎与改名し

鉄之助義ハ田中光太郎与改メ御大将會沢元助殿之壺番家老と相成、其

勢とふくとして罷在候處、同十二月五日関東御取締方三人

手下之者三百余人召集メ、右天明田沼へ相詰メ、出流山之様子相伺候処

中く大勢相集り候二付、致方無御座候、それより

御公儀様へ御伺之上、同月十一日之夜、関東御取締出役木村（機藏）藏殿

099—116

渋谷鷲郎殿・渡辺信一郎殿其外五人之者、郡中寄場く大小惣

代、其外道御案内之者召連、近邊之百姓へ鉄炮持参之者呼出し

人足等觸當、其勢五、六百人栃木町へ押寄相待候處、右浪人之者

六人栃木町へ罷越、足利領主戸田長門守之領分栃木町ニ陣屋有之



候處、右六人陣屋へ押込、金子千五百兩拝借之掛合ニ而陣屋役人共無

據右之金子貸遣し可申段、挨拶ニ及候處、當時五百兩差遣し、残

千兩之義ハ三人へ御貸可被下候与相談仕、右三人差置、三人ハ出流山へ帰り候處

陣屋役人共右取締方与申合、残三人打殺し申候、其時當村ニ而鉄炮方人

足ニ罷出候者中根ニ而源田房松、鷹巢ニ而小野嶋之助・龜山文吉番人

定二郎礮入ニ而大木岩二郎・植竹長松、右之者鉄炮人足ニ栃木町へ罷出申候

此時浪人之者又々三人罷越候ニ付、猶又三人打殺申候、此取沙汰ニ而出流山

へ集り候浪人不残罷出、馬印ニ者丸二十丁之幟押立ほらかへ吹立く

凡百八十人計、岩船山を差して押来り申候、此時十二月十一日四ツ里村

与申處ニ而大合戦ニ相成、先陣ニ而渋谷鷲郎殿五、六十人ニ而鉄炮打掛

099—117

小野寺村人足三人切殺し浪人式人切殺し、それより岩船山ニ而戦ひ候

浪人九人計打殺し追々浪人共逃去候を四、五十人召捕、同十二月十七日十八日

兩日之内、浪人之者四十老<sup>太</sup>人、天明川原ニおゐて打首ニいたし申候、此時十八日

ニ只木村栄太郎義吉田定二郎与名乗候者天明ニ而打首ニ相成申候、弟

鉄之助義田中光二郎義何方へ逃去候哉、行方不相知、是より十二月廿一日

之夜江戸表ニおゐて取締方屋敷へ産州浪人共押込、取締方手

疵請候者も有之、且又切殺れ候者も有之由ニ御座候、依之江戸中

御身廻り方酒井左工門様御大将与して大名拾壹頭産州之屋敷へ

押寄、十二月廿五日大筒石火矢打掛ケ、産州屋敷打こわし焼拂へ申候

其内二江戸西御丸御焼失いたし、右浪人共地雪火仕掛候義と相見申候、十二月

廿日夕廿四日迄産州肥後大戦有之、肥後大勝利与申事ニ御座候、明れハ正月三日

午之刻今京都ニ而大戦ひ有之、會津と戦候処、會津ことく敗軍いたし

候由ニ御座候、京都御固メ之義ハ土州・長州・雲州右御三方にて御守護被成候由ニ御座候

伏見へ御出張有之大戦争と相成、伏見ハ不及申、淀・鳥羽邊迄火掛申候、將軍

099—118

伏見へ逃去り候、京・大坂・淀、右三ヶ所一ツ時に焼拂へ漸々將軍逃去り

上喜撰船に乗り江戸表へ逃込候處、江戸表ニハ天正院様・かすの宮様

御式方御立腹ニ而御城ニ入給ふ事相不叶、御殿山へ四、五日野宿いたし候由ニ

御座候、正月十五日上方勢所々へ参り乱致候間、所々嚴重ニ相成申候

関東取締出役其所々へ隠居申候、此度

仁和寺宮様、一ツ橋將軍御征伐として御下り被成候義ニ付

今般御触書到来候付、其文曰

徳川慶喜天下形勢不止得事、大政返上將軍職

辞退相願候ニ付、断然与被聞食既往之罪不為

問、列藩上坐とも被 仰付候処、豈圖や大坂城へ引取

候旨趣、素(非カ)の詔謀在之、去三日麾下(先鋒)之者追引率

剩歸國被 仰出候、會桑等(先鋒)を出入鉾として闕

下を奉抱候勢既彼今兵端相開候上ハ慶喜返状(反状カ)

099—119

明白、始終奉敵朝廷(朝廷)へ御宥始(宥恕カ)へ之程絶果(セツカ)、不得

止追討被 仰付、抑、兵端相開キ候上者速ニ賊徒誅代(後)

萬民塗炭之苦を被為救度叡慮ニ付、今般

仁和寺宮征討將軍被 仰付、是迫偷安怠惰ニ

相過、或ハ兩端を抱、或ハ賊徒從居候者多くも真ニ

悔悟憤發國家之為、尽忠之者有之輩は寛太之(マヤ)

思召ニ而御採用可被為在、尤此節ニ至り大義不弁、賊徒ニ

謀メ通(マヤ)、或ハ潜居致候者、朝敵同様嚴刑ニ可被處、心

得違無之様可致事

慶應四年辰二月 日

如此二月十三日京都分御触書之長持参り、中山道下り、夫分例弊使道ヲ

下り、梁田宿へ参り、寄場へ右之触書一枚ツ、請取、写ヲ以寄場分組村々へ

099—120

相達申候、當村役人も被召出、御触書拜見其上村々へ壹枚ツ、相渡し

其後御大名籙本中勝手次第第二國々へ引取可申旨

公儀分被仰出候、右二付、大名籙本國々へ引取候荷物江戸四方之河岸くへ引越之荷物大さわき、江戸中諸道具拂へ物山のことし、此時諸籙本

脱走致も有り、知行へ引込候も有

此時一ツ橋將軍 上野東叡山<sup>〔叡山〕</sup>へ引込、宮様ヲ以京都へ御歎願奉申上候所

天朝ニおゐて御聞濟無之、無余義宮様御引返し被遊候、京都ニおゐてハ

關東征伐として諸軍相催し官軍惣大将にハ

大総督様御大将東海道御下り也、中山道御大将にハ

小御総督府様・岩倉殿様御下り也

慶應四年辰三月六日産州様<sup>〔産州〕</sup>・長州様・美濃大垣様東海道嘉奈川宿へ押寄

猶又勅使御下向被成、東海道・中山道人馬人足觸當申来り候、同月七日産州<sup>〔産州〕</sup>

099—121

梁田宿合戦爰にあり

長州・大垣之勢、凡三千人、桶川宿・上尾宿・大宮宿迄下向致候處、同月八日之夜

右三宿へ泊り候、惣勢一ツ時に引返し野州梁田宿押寄、右梁田宿にハ兵歩

之者千弍百人余り泊り居候所、上方勢梁田宿へ押寄、同月九日夜明分大合戦相成

關東始メ而大合戦ニ御座候、兵歩之者打ちまけ、六十人程打死いたし申候、其時

大炮小炮打出し、近邊大キ驚キ、所々へ逃込申候、梁田宿之女郎共當村迄逃来

此時鵜木村堤土手へ右合戦見物之人々山のことく御座候、同十日之昼、近村近郷分見物之者梁田宿へ山のことく押寄申候也、長州・産州(薩州)・大垣之勢館林町へ押出し、川俣ヲ通り、又候館林町へ引返し申候、それより江戸表へ押出し兵歩之者ハ八、九百人野州出流山へ引取申候、上方勢勝軍ニ而大炮七挺、其外小道具不殘奪取、近鳥(近)之人足共集め引取申候、大沼田村分人足三十六人差出申候、右人足之者共鉄炮玉薬り貫請候者有之、其外脇差陣笠数多有之候

且又、江戸 御城之義ハ 御総督府様御渡可申御沙汰ニ付、早速御渡しニ相成、其外武具・馬具等之義、猶又御蔵共相渡可申旨ニ付、不殘

099—122

御渡相成申候

爰ニ

一ツ橋將軍 上野東叡山ニ入、慎罷在候

所々打こわし

三月十三日上州太田宿へ打こわし始り、四、五軒打こわし、木崎宿へ参り少々打こわし、それ分所々ニ参り降参致候村々宿々ハ米・金銀奪取

三月十四日村上村・免鳥村・寺岡村、右三ヶ村之困窮人、御大師山へ参會し

質屋共打こわし候杯与申、右三ヶ村質屋十壹軒、穀屋三軒右十四軒ニ而金子三十五兩差出濟方相成申候

猶又、上州桐生町へ打こわし参り、それゝ小俣村へ参り、木村半兵衛方金子

米金差出候哉、何れ共掛合中、足利御陣屋ゝ大砲打掛ケ打こわし、人

三人程打取候處、大勢逃去り又々所々へ打こわし参り申候、四月六日

099—123

官軍方江戸御城へ押寄、一ツ橋將軍へ御掛合之上、御城明渡ニ相成申候一ツ橋將軍様水戸へ御引移り

四月十六日下総国小山宿(水海道カ)少々はなれ水戸海道ニ而大争戦有之、官軍方

大敗軍、同十七日猶又合戦有之、是又官軍打まけ、死人山のことし、同

十九日宇津宮(郡)ニ而大戦有之、此時正ギたへ、三平たへ宮城へ押寄、大合

戦と相成、又候官軍館林・佐野(郡)両人数押出し、宮ニ而必至と戦ひ候へとも

是又敗軍いたし歩兵之ものニ、宇津宮焼打(郡)ニいたし宮の城不残乗取

申候、館林(佐野)・佐の両軍勢、三度共敗軍ニ相成、無據右両勢引取、館林より

下高橋村川岸へ相詰、巖敷番仕候、同廿一日歩兵組三平たへ(隊カ)之者植野村

陣屋へ押寄申との嘶ニ而植野村之者共大キニ驚キ近邊へ荷物等相運

上ヲ下へとさわきけり、同壬生之城へ押寄、同廿二日之夜、落城と相成申候由御座候、夫々官軍ニしたかへ植野・足利・館林・結城・下だて之人数七、八百人ニ而上州沼田之城押寄申候

099—124

壬四月九日沼田之城落申候、是も官軍降参致申候、

小栗様討死

爰にあわれと申ハ當村知行いたし候小栗上野介殿

壬四月十日上州権田村へ土着致居り候處、近邊之百姓共打こわしと名付、小栗上野介殿之居村寄、上野介殿へ大炮打掛ケ戦候處、百姓共にげさり

けり、然ル處、官軍様方押来、右上野介殿居村押寄、小栗若殿様

高崎之御城官軍へ召出し、右小栗殿大炮式挺・金子三千兩差出降参

いたし候所跡へ押込、上野介殿御召捕、三之倉と申所にて家来諸共六人

打首ニいたし、若殿も高崎におゐて打首ニ相成申候、右家内之者共は

越後国へ落、夫々會津へ落申候

小栗上野介之上地辰五月官軍方順祭使

(巡察使)

星野傳左衛門様・宮崎周助様右兩人當村高巢年番名主文吉宅へ御止宿中

(鷹巢)

小栗様百姓困窮之者へ御米六拾俵被下置、其外金子等被下置、難有事ニ

御座候

099—125

壬四月三日四日兩日下総国古河分行徳・流山・市川ニ而大合戦御座候、官軍勢大キ敗軍之様子ニ御座候、就而者御傳馬助郷所々被仰付候ニ付、百姓難洪御座候

御総督府様・岩倉殿様、古河町御城へ御着有之、夫分館林町御城へ

御着有之、御総督府様御年十一才位ニ相見へ申候、岩倉殿様御年十四、五才

ニ相見へ申候、館林分行田町御城へ御進軍被遊候、其時大沼田村組合

北猿田村組合、右両組合村ニ而人足百人被仰付、壬四月十八日夕方館林町

千服寺<sup>(區)</sup>へ相詰、同十九日

御総督府様岩倉殿様行田之城へ着陣いたし、當村人足勝藏・力

太郎・辰藏・重藏<sup>(マ)</sup>右六人罷出申候、才料名主介役啓二郎殿参り申候

同廿日日光道中今市宿大戦有之由ニ御座候、怪我人多く天明町へ

罷越申候、足利領主・植野領主・沼田之御城へ取子<sup>(塲)</sup>ニ被致、漸々官軍方

099—126

千五、六百人押寄、沼田之軍勢降参いたし申候、官軍方上分五千人

余御下り、人馬人足之義何方共無之触當申候

御総督府様行田城分江戸へ御越被遊候



五月七日宮崎周助様・星野傳右衛門様、小栗様知行御取調之上、外三給名寄帳、又者人別帳御改被成、惣高御取調之上、給々役人共へ金三両ツ、御苦勞賃被下難有事ニ御座候、其上村方境、分杭立候義、給々相談之上、相立申候

是從北 天朝 御料

右之分杭相立、猶又御林入會村々拾ヶ村も

大沼田村

呼出し年々野火入除、境筋刈拂可申旨

拾ヶ村役人へ申渡し申候

五月十四日十五日江戸上野東叡山ニおゐて戦争有之、正義たへ官軍

方大戦争ニ而此時東叡山不残焼拂へ申候、夫々正ぎたへ東叡山宮様は

099—127

奥州金花山へ落着申候、奥羽両国之大名不残打寄、官軍方双方

到之戦ひニ御座候、是ニ付足利町人足助郷被 仰付、古河町も人足被仰付

古河助郷之義、御免願上候而足利定助郷と相成申候

慶應四辰五月足利郡村々廿五ヶ村、足利町へ定助郷と相成申候、此時

取究申候、

八月中は又足利郡ニ而大名高家天朝御料相除、籙本知行廿五ヶ村く二而  
 白川人足被 仰付候間、則奥州白川へ正人足相勤申候、其節大沼田村ニ而  
 罷出候人足、中根仲助・才料惣七・礪入清蔵・西根初右衛門・子清助壱日式五匁  
 ツ、ニ而相勤申候

夏成御年貢上納金之義ハ字津宮ニおゐて知縣事御役所鍋嶋道太郎様

相納申候様御觸有之、弥鍋嶋道太郎様下野一同御年貢相納候様ニ相成申候  
 099—128

同九月中官軍惣勢會津之御城へ惣掛りニ而惣勢百廿余万騎惣掛り

九月廿日會津降参、廿二日御城相渡し候、白川人足當村分出申候者、九月  
 廿九日帰り申候

一、 下野國一統知縣事 日光縣ニ有之候處内 明治三午年十一月廿八日上州館林  
 御城主領分与相成申候△

△野州梁田郡・上州山田郡・同邑楽郡ニ而四十九ヶ村、明治三午年十一月廿八日引渡  
 相成申候、御年貢米之義者日光縣出役井上大参事・山口小参事

若林権小属・倉持権大属御檢見被遊、其上御引渡り相成申候

一、 御大名方御高拾分之一卜相成、御家老様大参事と相成、萬事御制事<sup>(政)</sup>

向大参事方小参事ニ而取計申候

099—129

爰に 慶應四辰年中戦争之折 皇臣と相成候御簾本方者

明治二巳年壹ケ年本録(秘)安堵ニ而御年貢・物成請取、然ル處

明治三年ニ相成候処、本録(秘)安堵之御知行所被 召上御當人者

駿府之御城主徳川亀之助様へ御引渡しニ相成、何とも

(あわれ)  
ああれなりける次第也

右之次第ヲ見てハ已来者主君は大切の物と末々之者迄

心懸可申候

爰に又主君を重んじ徳川様へ付て駿府へ御供仕候

099—130

御簾本ハ大キに立身仕候、 皇臣ニ相成候者ハ誠にく

(あわれ)  
ああれなり

斯て又脱走致候御大名御簾本方ハ奉對

徳川様至極宜敷義ニ御座候、追々駿府へ

御立身相成申候間、已来主君を捨テ申間敷候

且又御大名方十分一卜成、御家老方二而政事仕候、御大名様方も藩知事と被 仰付、所々 傍示抗 何之藩支配所と相成申候

099—131

薩州姓名

薩摩秘鑑

享保十四己酉年十一月十五日

御公儀様へ書上候写

薩州家士凡姓名(卷二)

抑、徳川家五代將軍 綱吉公御法号常憲院殿御養女竹姫様

御事八代將軍 吉宗公 紀伊殿の御養君 御代

享保十四己酉年十一月二日 薩摩・大隅・日向兼琉球國之大守

嶋津繼豊江御入興二付、嶋津家士銘々江御土産被下候間、知行高并役所

等巨細二取調可達 御聽之旨御沙汰二付、則同年十一月中

099—132

御老中 松平伊豆守殿迄被差出候、今之世迄薩摩武鑑与

申傳候

右 嶋津家琉球國へ一手之勢二而渡海いたし、七十五日之間に

平地致、已後家門益々繁昌、日本之諸侯第一之御大名与世上挙て

評之、右之節家士数多扶持し罷在候得共、當時役向相勤候者計

知行高并性名申之、尤役義申付候者共ハ小身たり共相認メ、無役之者共  
は大身二候といへとも、相除候、頭役支配役相勤候者共、頭支配其性名計之  
組子之者共ハ凡人數計申上候事

099—133

一、高四拾貳万三千貳百拾八石 種ケ嶋彈正

但シ右ハ嶋津一家之舊臣居城、代々種ケ嶋一國、外城島陳屋

拾老ケ所、一族家臣共迤居住、凡騎馬之士七千五百騎余、徒士

与力・同心共迤、大數七万五千六百人程、右地方東西六拾五里

廿八町、南北九拾七里半八町餘と、古來今申傳、鹿兒嶋へ海上

三拾九里八町与申傳

一、高貳拾四万八百九石余 嶋津内膳

一、同拾八万 石 町田左近進 右居城琉球國

099—134

一、高拾貳万五千七百石 嶋津左京助 一、高拾貳万石 嶋津右衛門太夫

一、同拾壹万九千五百石 嶋津大和 一、同拾二万三千三百石 嶋津中務

右四人ハ老入ツ、江戸留守居為致、交代候もの也

一、同八万石 伊勢兵庫亮 一、同六万石 嶋津因幡

一、同六万石

嶋津和泉

右三人ハ頭役ニ而壹万石以上三万迄、拾五人ツ、又五千之高之者拾五人ツ、

都合三拾人ツ、組下ニ為仕候事

一、同五万石

嶋津下野

一、同三万石 伊勢勘太郎

099—135

一、高三万二百石

嶋津外記

一、高三万石 嶋津土佐

一、同三万石

嶋津帶刀

一、同

右五人之者は壹組壹百人ツ、組知行、高千石以下五百石以上之者

六百人余支配申付置候事、但シ壹組百廿人ツ、

一、同壹万石

嶋津主水

一、同八千石 島津宮内

右兩人者五百石分千石迄壹組五十人ツ、支配為仕、四ヶ所之屋敷

之非常為防之差置候、右組子性名子并召連之者、数多御座候得共下々

之義二付、略申候事

099—136

一、高拾貳万五千石

新納右エ門太夫

一、高七万石 橋本丹宮

一、同八万石

佐野形部

一、同七万石 嶋津伊豆

右者鹿兒嶋之城四角四天に陳烈居住仕候事、但シ新納右衛門太夫鬼界ヶ嶋

一同に頂領シ、此島東西凡廿里南北三拾里餘りと申傳

高三千石ツ、式拾五人、同部屋住無高六拾三人  
前廻より江戸屋敷四ヶ所非常防のため差置申候

一、高拾六万八千五百石余 秋月大膳介 一、高六万石 嶋津石見

一、同六万石 朽木信濃 一、同六万石 三好大膳

一、099—137

一、高五万石 高井上総 一、高四万九千石 白川外記

一、同六万四千石 大内大学 一、同三万五千石 内藤勘四郎

一、同五万四千石 海老原源右衛門 一、同三万五千石余 嶋津太郎左衛門

一、同六万三千石 □代又左衛門 一、同三万六千石七斗三升 八田 奎

一、同五万式千石 平松玄蕃 一、同三万五千七百石三斗 矢部出羽

一、同五万石 坂井八雲 一、同三万六千四百石 折野長門

一、同五万石余 伊東河内 一、同式万八千石 坂井主計

一、同式万七千石 白藤上野 一、同式万七千五百石 菊地大煩(天悠)

一、同式万七千石 渡辺朝負 一、同式万七千石余 嶋津伊勢

099—138

一、同式万七千石 八木勘ヶ由 一、高七万八千五百三十五石 秋月内膳

一、同式万七千石 内藤瀬八 一、同壹万五千式百石 小従大膳

一、同貳万石 伊藤但馬 一、同壹万石 嶋津新九郎

一、同貳万石 藤星德平 一、同壹万石 嶋津将監

一、同壹万五千石 原田遠江 一、同壹万三千貳百石 嶋津米女

一、同壹万五千石 熊谷栄蔵 一、同壹万石 嶋津形部刑

一、同壹万五千石 大庭武右衛門

右者万石以上之大名与号、鹿兒嶋城交代二居候、尤銘々住所并

知行所迄路次遠江近カ不同二候

099—139

一、 琉球國武帝大王廟カ □料高七万石

但シ琉球本城二数代住居候処、嶋津家幕下二相成候後者琉球在城に候間、則

王城二南殿槽二城代惣鎮守之家来ニ差置、其外夫々七嶋十八ヶ所共

七ヶ所陣屋等迄、家来差置下知為致来候事

一、 高拾五万三千石 嶋津慶弥

右者琉球王城惣奉行申付置候事、但シ右之外〇十〇八琉球十八ヶ城二陣屋

貳拾七ヶ所七嶋共、守護申付差遣し置候家来知行高左之通りニ御座候

一、高三万六千五百拾貳石 嶋津兵庫 一、高三万五千石 嶋津主計

099—140

一、同三万五千石 嶋津五郎 一、同三万石 嶋津久太郎



一、同三万石 島津大学 一、同三万百石 島津城之助

一、同三万五千石余 島津飛驒 一、同壹万七千石 島津小太郎

一、同壹万八千石 島津左京 一、同壹万五千五百石 島津縫殿

一、同壹万八千石 大友中務 一、同壹万貳千貳百石 矢部内藏介

一、同壹万千石 大内三（永九）大夫 一、同壹万千石 藤藏豊前

一、同壹万石 島津弥右衛門 一、同五千三百石 島津左京

一、同五千石 折野壹岐 一、同三千五百石 松平相（前奥）榛

一、同三千貳百石 朽木近江 一、同貳千八百八十石 町田左近

099—141

一、同貳千百十六石 伊勢太郎 一、同千三百拾石 熊谷要七

一、同千四百八石 原田右衛門助 一、同千貳百九拾石 島津銀一郎

一、同千百拾石 島津若狭

右貳拾六人琉球七島并陣屋廿七ヶ所支配申付置候

一、高四万八千七百石 大堂寺五郎太夫 一、高貳万六千三拾石 橋本丹後

右兩人者隔年二京都屋敷勤番為致来候事

一、高貳万八千石 天野兵庫 一、高壹万八千石 筑（卷）葉多吉

一、高貳万七千貳百石 小嶋銀太夫

099—142

右三人者大坂屋敷勤番家来支配与して年々壹人ツ、交代為

相勤來り申候、鹿兒嶋居城為守護、城下近邊居城(佐尤)為仕候

家来性名略之、凡人数并知行高、左之通り

一、高九千石ツ、近習廿人 一、高八千石ツ、用人拾人

一、高三千石ツ、鉄炮奉行四人 一、高貳千五百石ツ、弓頭拾貳人

右五役之者、壹備二付、高貳千石以下貳百石迄七拾五人ツ、支配仕候

一、高五千四百石 津川大和 一、高四千石 松野源五右衛門

099—143

一、高三千九百石 菱川重太夫 一、

右三人持筒大将壹組ニ預置申候

一、高三千石 桜崎大膳 一、高四千五百石 木下孫六

一、同三千五百石 鹿嶋善右衛門

右三人持弓頭壹組二千石以下貳百石迄拾人ツ、支配申付置候

一、同貳千石ツ、大目付八人 但シ壹組七百石今五百石迄拾五人ツ、支配申付置候

一、同八百石ツ、使番拾六人 一、高七百石ツ、小納戸拾四人

099—144

一、高五百石ツ、大小性六拾人 一、高五百石ツ、中小性六拾五人

一、高貳千石ツ、寺社奉行五人 但シ貳百石以下百五十石迄壹組二十五人、外二百石以下之者三十人ツ、支配申付候

- 一、高千石ツ、 評定奉行四人 但シ徒士・同心貳拾人ツ、
- 一、高六百石ツ、 町奉行六人 但シ徒士・同心拾八人ツ、
- 一、同四百石ツ、 廣前番六十人<sup>(數)</sup> 一、高千石ツ、 腰物役七人

但シ同心十人ツ、

- 一、同千石ツ、 勘定奉行貳人 但シ同心拾六人ツ、

099—145

- 一、高千石ツ、 濱邊普請役八人 但シ卷組二百石分百五十石迄三人同心四人ツ、

作事小者三十人ツ、

同千石高 地方勘定役七拾五人 一、高四百石高 大納戸拾人

同三百五十石高 船手大將拾八人 一、同六百石高 番醫師拾八人

同七百石高 小性六人 一、同三千石高 奏者番三拾人

同五百石分千石迄大寄合役百拾六人 一、同三百石分千石迄寄合六拾人

同五百石高 給人三百人 一、同五百石高 祐筆拾三人

但シ百石分四百石迄介廿人

同八百石高 使者番拾八人

099—146

- 一、高三百五十石高 使者番介廿拾八人<sup>(ツ)</sup> 一、同貳百石高 与力五百人

- 一、同三百石高 小目付三拾人 一、高六千八百四十石 二階堂教馬<sup>徒士大將</sup>

吉凶兼務方

一、 同七千五百石 新納右衛門助 一、 同五千五百石 秋月小大膳

一、 同四千石 橋本右近右衛門 一、 同九千石 伊集院主税介

一、 同八千石 佐野備後

右者五人、鹿兒嶋城内二居住罷在候者、用向司<sup>(御儀方)</sup>迄諸向<sup>(マ)</sup>下知為仕候事

099—147

一、 弓・鉄炮・鎗・釵・棒・柔・馬術其外武功勇力之者共凡千七百人余、但シ右之者

共知行高八百石分三千石迄、右之外部屋住居ニて當時無役無足之者ニ候得共

一藝ツ、相勝候者、壹万九千八百人余御座候

一、 先祖右大將家之正流ニ而薩摩・大隅・日向其外七嶋之領主たりし候処

御當家ニ相成候間、家久江從

家康公為御下知、琉球國之俊、<sup>(義)</sup>一手之人数ヲ以、平地致すニおゐてハ末代迄

島津家之幕下ニ可致旨上意ニ付、則一手之人数ニて首尾能及平地ニ、其節

琉球王始メ其外数多召連、出府仕、已前御駒速<sup>(筋束)</sup>之通り子々孫々ニ到迄

099—148

私家之幕下ニ被下置候旨、且島津家分琉球國并外嶋迄任心下知

可致旨 御墨付被下置候、右ニ付前代三ヶ國高七拾七万八千石余、種

嶋・鬼界ヶ嶋・琉球國外、七嶋・新嶋迄都而高合多分ニ相成、私四代前

薩摩守綱久家督之節、取調候処、其砌分只今ニ至迄扶助之諸家來

末々迄、凡知行高八百七拾万石余差遣候置、左候得者四代前綱久分

已前ハ都而地方上り高、凡九百八、九拾万余も御座候、地方掛り之者共へ為相糺

候処、右之高明白ニ御座候得共、其餘之義ハ一向相分不申旨申聞候、且又三代目三位

中納言家久より以來在府并留守無差別、居城鹿兒島人馬、平日騎馬

099—149

五千八百三拾騎、徒士侍并与力其外末々迄拾万余人、右者昼夜ニ不限

何時ニても相圖次第

銘々持場へ相詰候儀定而、若延引之輩ハ嚴重之咎可申付家法

ニ御座候、右者此度御沙汰之趣、書面ヲ以達上聽候、右之通ニ御座候

間、御含宜敷御披落可被下候、以上

享保己酉年十一月 日

松平大隅守

源繼豊

土井大炊守殿(マ)

松平伊豆守殿

御老中 堀田相模守殿

土屋紀伊守殿

稲葉丹後守殿

099—150

右之通り徳川天下ニ書上申候

時に

文久三年異国船薩州へ押来り戦争ニ及候

合 夫々追々徳川天下ニ障り、慶應四年辰六月亡候

爰に薩英戦争之次第

扱、今夕着船之飛脚荒増候得共、御達し申候英國軍艦六月廿二日横濱

出帆、同廿八日國許へ着致し、廿九日七月朔日應接有之候処、非常申出候ニ付

不整、同二日争戦之次第左ニ

099—151

七月二日午ノ刻頃、鹿児島城之河岸町家出火、同夜七ツ時頃鎮る、昼々

大風雨ニ有之候處、英軍艦六艘大砲打掛候ニ付、此方々人数繰出し

討合、午ノ刻々初り同三日辰ノ刻迄大雨中ニ争戦、出火光白昼のごとく

此方々幸の便与相成、英艦二艘乗取、船将式人討取、シヤリセタヘール

ケンイシントシヨンニトル討取候ニ付、残り軍艦四艘敗合候ニ付、追打蒸

氣車を打崩シ、帆柱打折候得共、破船之儘洋中江退帆いたし候

同時ニ同国之商戦三艘、途中々同断退帆いたし候処、商戦故

人足多く遅滞致候間、追留、乗入船主始、乗候者四百余人生捕、船三艘

099—152

并積荷大炮玉葉・パン商品・紺糸・木綿・葉種、日本小判壹分判

式朱金・具足・鎗・長刀類三艘ニ夥敷積入有之、右生捕商英四百人

之者入牢申付、軍艦二艘・商船三艘乗取、湊内江繫置、三日鹿兒嶋（所）分

七里脇湊口、英夷之軍艦四艘、破船之儘碇泊致し、同前固メ人数分

發炮之所、玉不屈ニ付、小船・漁船江乗組及争戦、英船分連發大炮

打出候処、小船故無別条乗付乗船致候、英夷討取、首汲持（百數）參乘戻

打取、英賊千六百余人、此方英船へ乗移り候節、誤而足輕廿四人海中へ

落入、小廻り船分すくひ上、無事、外ニ薄手負無之候、三日大勝利

099—153

右戦争七月二日午ノ刻海岸商家より出火、同寅ノ刻鎮る、同時ニ争戦

相始り、陸船打合、翌三日辰刻迄船将式人上中下官マトロス千

九百八十四人討取、軍艦二艘商船三艘英夷四百四人生捕、両日之

戦争ニて此方侍分薄手式拾六人、足輕參拾四人、重手・深手無之

右之趣、去ル三日發足之早飛脚、今十八日未刻着致候ニ付、御達し申候

此方任例ニ御届ケ不申候

上□屋敷

文久三亥年

八月 日

薩州藩中へ

099—154

乍恐奉申上候

一、私祖父儀者生國艦船郡之者にて江戸表江罷出、裏住居ニ而渡世仕

候処、親之代今相應ニ取續、表店江住替渡世仕、其後私代ニ至り相續仕

御當地益々繁昌仕候ニ付、御蔭ヲ以、身分相續、商賣仕候處、昨年今神奈川

横濱ニおゐて外国人交易御差許ニ相成候ニ付てハ私義同所へ罷越

渡世仕度奉願上候、則御聞濟相成餘日も無御座候得共、引移渡世之品

々持参仕、横濱ニ而ハ格別利潤も御座候間、段々往来仕候内、次第ニ外国人共

渡世之品都合能相成、大慶仕候処、異人共深く懇意ニ相成候間、別而利潤

099—155

為得具候間、難有事ニ存、弥以異國ニ随ひ然ル処、私義同様之者凡

式拾四、五人も御座候得共、名前住所等は聡与不相存候へとも、江戸住居

候者両人も可有之与奉存候、其餘者近郷之者ニ御座候、然ル処、去冬

御城御焼失ニ付、心付候者は迄日本御國恩奉請、乍罷在、異國江随

居候は甚た恐入候次第ニ存、品々改心仕、是迄破國<sup>(後)</sup>之使節役人共之所存

承り候而者実に身之毛も余立計無勿躰、今更自分之罪科後悔



奉存、神々様江も御詫奉申上候ニ付、異国人共之内存承り込候丈ヶ左ニ申上候  
一、 異国役人之存心ハ一躰イキリス國安王之<sup>(臣)</sup>取工<sup>(臣)</sup>ミ請繼、異国初而浦賀沖へ  
099—156

渡來仕候アメリカ國之役人ハ試ニ致、日本之強弱を謀、人心之虚実ヲ  
探り考見候処、殊之外柔弱之國与見込候よし御座候

兼々承り候通、日本國ハ金銀大方掘尽し當時ハ諸國拂庭ニ<sup>(感)</sup>  
相成、其上奢り移増長致、政府并諸大名共困窮ニ及居候間

當時日本ヲ奪取候機會ハ時節到來成与存込、追々姦謀ヲ以、最早  
七、八分ハ掠取候由ニ御座候

日本之役人政事之様子、大方見聞及候間、聡与相分政府御内證も

見積り、金銀ハ政府并諸大名<sup>(奪い込力)</sup>ハ疲弊ニ為致候積ニ候積之工夫<sup>(マツ)</sup>、專之由ニ候  
099—157

町人共は沢山ニ金銀所持仕候者有之候へとも當時之濁り世、皆一同強欲  
候事、甚安し其上日本之△

之者共故、異人ハ利潤ヲ右之者共ニ為得、手付△金銀ハ外國へ奪取候得共  
自然与日本中之者、苦儀計ニ相成候間、其時鋌炮不振して日本ヲ隨

候事掌ニ有之候由ニ御座候

一、 兩年之内ニ者日本國悉くおとろへ候事、異国存分ニ可相成、若不承

之義申聞候ハ、早速軍艦數十艘津々之湊に差向渴(渴カ)ニ為及候間

日本中ハ微塵与相成可申与見込申候由ニ御座候

日本人者(ママ)たる人ニ相見不申候間、謀安し、小兒ヲ抱クか如く、殊ニ又支那國ハ

099—158

日本程姪欲之深キ所ハはなく候へとも、皮是(後)三拾ヶ年不足ニして、手ニ

入候由、夫とハ事變し候故、日本人者姪計廻し安しニ御座候

日本神國といへとも今者世に善神曾なく、其故ハ人心至テ薄精(精)

ニして銘々色欲ニふけり、上菅人分下萬人ニ至迄不実不正ニ相成、第一

國家政司奉行所役人我儘ニ安心して、勝手次第ニ依怙ヲ致し、又ハ

学者・武者多し候へとも佞学姪術にして悪心增長之者多く

武威甚薄く億病(億)之者数不知候故、戦争ハ殊之外忌嫌ひ

候者計、況火術之業、猶又未熟故、謀安くて亡し安し、且、此國

099—159

神武之國与申は往古之事ニ候、大地震・大荒し・津波・火之上・悪疾

流行、尤飢饉等ハ無之候へとも、當時世柄飢渴ニも相増たる風情にて

諸寺・諸山江祈禱仕候共、其微曾てまします、尤現證成べし、右

之如く故、悪神・悪摩(ママ)充滿する也

日本者四海ニ候へとも、我等國々々四方海西江軍艦無之故、海上通路(前)

不及致、諸方へ軍送陸路計ニ相成候間、人力次第二疲申候、戦  
争ニ及候へ者、早速亡る事、眼前なり与申居候

099—160

日本人ヲ勸メ込候ハ神國与いへとも、今者世に曾神なく、若神有といへとも

祈祷之印なく若利益有とも金銀財宝立所ニ到来候所ハ

無之、外国之宗旨者神々尊キ事顯然たり、金銀居ながら手ニ入

候自由自在之事不叶といふ事なし、宗法を以て其尊キ事

知るべし、種々書物も呉候、(マヤ)日本人民異國ニ引入申候、前条申上候通

當時政司之役人様方佞肝較知成る故、不忠不義甚敷、自分

之家財江栄候へ者、能事と思ひ他之滅する者不構、第一

神君之掟ハ大方破逸、(運カ)唯欲心日々増故、一寸先之事も不見、其日

無事ニ濟者能キ思ひ務故、(業カ)臨時之事なれハ其場ニ至て當惑致計

099—161

何を申立候而も急ニ者評定決せず、平生御役人之腹空虚成かゆへ也

都而餘等す、(よらす)亡シ安し、三、五ヶ年之内ニて外國掌ニ日本ヲ握り申居候

右之通為申聞候、此外様々之事共申聞候得共、聞召兼候、右之次第

漸聞取申候、種々手ま似ニて為見候得共、分兼候得者相考へ候へとも

御國恩ヲ忘脚他候儀深ク恐入候間、改心仕候、依之前々之趣申上候間

私罪科之儀者御免被下様、偏ニ奉願上候

越前屋藤右衛門

文久三亥年

八月 日

横濱住居

099—162

尚以、奉申上候、異國人持候切支丹之餘類少々異候由、寄怪歌之不思議

之事共有之候ニ相違無御座候、私友朋之店イキリス人ホイスリト申者

参り懇意深ク仕候処、色々術を行見セ申候内、錢箱之錠前ハ鑑ニウ

つし、其移縷(移辦之)之如く之者ニテ文字を書躰ニ見セ請候処、無程右之

錠前少々宛明申候、鏡さへ移る程之物、自由ニ成申候由申聞候、皆々

尊キ事ニイヘリ、傳法請候者も江戸・横濱・近郷六、七人も有之、私義も

難有法与一度ハ存候へとも改心仕候ニ付而者、書物類差上申候、右宗門流

布仕候而者國家之一大事ニ相抱可申候間、早々異國人帰帆被 仰付

099—163

交易御差留之御工夫肝要与奉存候、歎深キ者とも金銀自由ニ手ニ入候与

申聞候間、追々信仰(密)之者、蜜ニ出来申候、御調早々御成敗被 仰付候様

乍恐奉存候、右宗門心信(信心)之者、殊之外嫌キ敵法与承り居候間、外國

人御打拂へ、右宗門猶御成敗可被成儀与乍恐言上奉申上候、以上

當八月十七日夜

大和國五條陣屋領桜井寺へ浪人躰之者凡百五十人程罷越、五條陣屋

押寄、焼拂へ御代官鈴木源内并元ノ手附長谷川恭助・手代木村祐藏

用人老人及殺害、手附桜田平三郎・同出役近藤米次郎兩人生捕連行

099—164

手代高橋勇藏・小原平藏・森脇新七郎・矢部永藏・常川庄二郎

右五人ハ逃去り、夫々浪人とも義、村役人共呼出し當年今御年貢是迄之半

減ニ可相納旨申渡、何れへか引取候よし、右之荒増し之次第不取敢

急便ヲ以、當月廿三日源内江戸御役所へ申越候、留守引請之在府御代官

佐々井半十郎今其筋へ御届差出候由、當今来月攘夷為御祈願

御幸 大和國神武天皇社へ御參詣、春日之社江御逗留、軍儀之

御評定被為在、夫今伊勢御參詣被 仰付、西國大名何れも御供之由

京都御代官小堀數馬之助今水戸役所へ申越

099—165

高臺寺(新館之)奸俗共朝敵松平春嶽寄宿差許候段、不届至極ニ付

放神火、焼拂畢、向後同様之者有之候ハ、可為同罪もの也

八月廿三日

生麦村見張所之脇ニ梟首

文久三亥六月廿四日

異人水先案内之者

重兵衛

右之者儀、異人之為、水先案内致、長州へ罷越候処、今般

攘夷之御沙汰ヲ以、已ニ打拂ニ及候義ヲ承知いたし罷越候者

彼等式愚昧之者与ハ乍申、天誅のがれざる所也、猶左ニ印所之

099—166

者とも同罪之越(應カ)有之候ニ付、近々一々天誅を加へ、如此者行ふべき

もの也

勘四郎

源兵衛

長兵衛

天下(マ)議士

芳藏

源太郎

松作

忠兵衛

勝藏

當三日大坂天神橋中程欄干五尺計の青竹二男之首級壺ツ罪書共駒(四)下ケ  
有之、(刑之)骸ハ其下ニ差置、左之通 罪書 石塚岩雄

099—167

此者義尽忠報國浪士之義心ヲ錦□、當節攘夷拒絶之折柄、當國有志軍用金杯与申偽り等第(マ)ヲ申掛、市中動揺為致、酒興遊婦ニ戯れ其罪難(通カ)□ニ付、天下義士ニテ差壓、梟首ニ行ふもの也

于時

文久三年七月二日

七月二日大坂日本橋ニさらし有之候あらまし

内通之者

守田道意

八月三日伏見旅宿ニおゐて殺害、同所さらし罪書

安福大次郎

099—168

右之者但州生野銀山御代官石神彦五郎手代元メ役等勤  
数年賄賂ヲ貪、百姓を苦めし一件如左也

爰に徳川天下滅亡之次第 武州足立郡花之江戸ニおゐて

寛永年中今慶應四年辰三月迄、凡式百八十年之間、打續

天下泰平ニ而安樂ニ暮しける処、嘉永六年丑八月（つひ）中

異國船浦賀表江到來仕候ニ付、天下次第ニ末衰となり、終ニ徳川天下

亡、御家来数多有之候得共、無餘義次第ニ而御簾本中知行を被召上候

099-169

慶應四年辰三月徳川天下亡、徳川御代官所之分ハ知縣事ニ相成

天子様江戸江下り花ノお江戸、東京府と相成、御大名方ハ藩知事と相成

御簾本ハ徳川様之御供ヲ致シ、駿河國へ行も有り、又ハ帰農ヲ相願、元知行

所へ来り百姓と成るも有、且ハ脱走致も有、人々おもひくニ成行事

なさけなき事とも成行ける、漸々明治三年ニ猶又徳川様へ帰参を

相願ひ、駿府行式人扶持・三人扶持取も有、元今徳川様へ御供致候御方ハ

極々宜敷御座候間、此已来ハ主人之御供ヲ致、放れ申間敷候

爰に書残ス也

099-170

抑當村ヲ知行致候殿様

高式千七百石 御屋敷ハ駿河臺也

小栗上野介

當村旧地頭成行之次第

高式千石余 御屋敷ハ麴町三番町

右小栗上野介殿慶應四年五月中上州

神谷徳太郎

権田村ニおゐて官軍方召捕られ上州高崎ニおゐて

高九百石余 御屋敷ハ牛込神楽坂



打首二相成申候

山木八太郎

高九百余(御屋敷ハカ) 御屋四ツ谷信濃殿町

真田造次郎

右神谷徳太郎ハ駿河へ御供致申候

右山木八太郎ハ皇臣と相成、江戸住居申候、夫々奥州縣江参り候由ニ御座候

右真田造(マ)二郎殿ハ元知行迫間村へ住居致シ、明治三年三月帰参ヲ願、駿府悴録太郎殿参り、造二郎殿家内三人ハ未夕迫間村罷居申候

099-171

徳川天下之御役々、此度御一新二付、替り候次第

今改メ

徳川ニ而是迄御大老与申候ヲ

太政官

同 御老中之事

参議

同 寺社奉行之事

神祇官祀

同 天使ノみさ、ぎ奉行之事

諸陵寮

同 御勘定奉行公事方

民部省

同 御目付役之事

監督司かんたくし

同 諸色御年貢役

租税司そせへし

同 道中奉行之事

驛通司えきどおりし

御 作事奉行之事  
土木

土木司

099-172

金堀奉行之事

鑛山司

金札掛り役所

通商司

商ひ掛り

通商會社

金銀引替役所ヲ

為替會社

異国と取引役所ヲ

運上所

こりからてりから(米支金)からふの役所ヲ

傳信局てんしんきょく

公事百姓ヲ取扱ふ事

庶務司

御勘定御勝手掛り

大蔵省

099-173

金銀出入之御掛り

出納司

小買物之役ヲ

用度司と

軍掛り御役

兵部省

軍学覚所

兵學寮

武器取扱ヲ

武庫司

武稽役所ヲ

造兵司

武家罪人調ヲ

糺問司

同	武家方懸り	刑部省
099—174	牢屋敷之事	囚獄司
同	御曲輪内取締	宮内省
同	外國懸り役所	外務省
同	御祐筆ヲ	文書司
同	御評定所ヲ	集議院
同	御学文書	大學所
同	医学之所ヲ	東校
099—175	おらんだ・ふらんす・ゑきりす	南校
同	書ヲ学ふ所	
同	大目付之事ヲ	彈正臺
同	船軍つかさとる事	海軍
同	くがつかさとる事	陸軍
同	西京御取締之事	留居官
同	ゑぞちかへほつ之事ヲ	開拓使
同	是ハ奥羽七ヶ國の	

目代ニ而行

按察使

099—176

同

元町奉行所ヲ

東京府

同

開ほつ人足取調ヲ

戸藉(糖)と云

同

御ふしん懸り

營繕(糖)司

右之通御一新ニ付、徳川天下之御役相替り申候

従是御簾本之知行召上、縣々ニ而支配申候

爰ニ明治三年午

天子様江戸ニ而新吉原へ行、且又柳橋之藝者ニ戯れ

御かんもりヲ被取候脱有之、甚た天子不行せき御座候

諸役人改メ右ニ相成候

099—177

東京

大政官役人

神祇官(糖)

諸陸寮(糖)

三条従一位

中山従一位

戸田従四位

岩倉正二位

白川正三位

谷森従六位

徳大寺正二位

梅谷正三位

鍋嶋従二位

福羽従四位

監督司

中御門従二位

北小路正三位

安藤正七位

参議

平田正六位  
植松正四位

平岡正七位  
田中正七位

民部省

大久保從二位

伊達從二位

澁沢正七位

廣沢 從四位

大隈從四位

内藤 無位

副島 從四位

伊藤從五位

由良 無位

佐々木從四位

吉井正五位

桑山 無位

斎藤 從三位

井上從五位

村上 無位

渡辺從五位

099 | 178

場城通從三位

林 從五位

用度司

土方從五位

得能從五位

山下 方義

中嶋從五位

驛通司

竹内 重勝

江藤從五位

前嶋正七位

長村 無位

田中從五位

都筑 景賢

大藏省

山口從五位

山内 影富

伊達從二位

五辻從四位

大隈從四位

内田從五位

通商司

伊藤從五位

多久從五位

次田從七位

吉井從五位

長松從五位

遠藤 無位

刑部省

林 從五位

正親町三條正二位

西本從五位

糺問司

佐々木從四位

士木司<sup>(土)</sup>

岩村從七位

青木從五位

安永正七位

楠藤 正幹

沢 從六位

山口 無位

鑛山司

高石 無位

井上正六位

099-179

宮内省

彈正臺

陸軍

萬里小路正三位

九條從一位

正親町正四位

烏丸 從三位

池田從三位

五條 正四位

久世 從二位

黒田從五位

四條 正四位

戸田 從四位

門脇從五位

外務省

開拓使

東京府

沢 從三位

東久世正四位

壬生正四位

高寫從四位

島 從四位

大木從四位

町田從五位

松浦 從五位

青山從五位

丸山從五位

小島從五位

柳原從四位

鮫島從五位

杉浦武三郎

集議院

按察使

平岡 兵吉

大原從三位

坊城從四位

神田從五位

渡辺正六位

安岡從五位

099-180

留居官

大坂府

函館府

中御門從二位

後藤四位

(清水谷)  
水谷從四位

河野正三位

京都府

甲府

新潟府

長谷宰相

洪井從四位

西園寺從二位

松田五位

長寄府

奈良府

青山五位

沢 從四位

園池從四位

大山彦八

馬場蒼石

明治二年己ノ二月改

今般御一新ニ付 右之通相改申候

諸國縣々之次第

099—181

諸國元御代官之事改而知縣事と相成申候

品川縣 古賀一平 小すげ縣 河瀬卯兵衛

かな川縣 井関初右衛門 かつしか縣 都筑小哲

兵庫縣 伊藤五位 とよさき縣 陸奥湯之助(稱之助)

にら山縣 江川太郎左衛門 かそち縣(かわちカ) 税所長蔵

日光縣 鍋嶋道太郎 にいがた縣 福田五位

うらわ縣 間嶋万次郎 をき縣 直木直佐

ミヤさく縣 柴山文平 わかまつ縣 林福之助

いわはな縣 中嶋中使 大津縣 朽木奎之丞

わかもり縣 池田徳太郎 かさまつ縣 長谷部長平

099—182

たか山縣 官原大助

なみ濱縣 伊王野次郎右衛門

さかへ縣 小川弥右衛門



ひだ縣 松方助左衛門

くらしき縣 小原与市

いな縣 北小路中務

さど縣 鳥井断三(ママ)

明治元年己三月 右之通知縣事相定申候

奥羽兩國分國之次第

099—183

明治三年中奥羽兩國分、(國名カ)名國改

磐城國 十三郡高、合六十五万八千三百七十九石八斗七升七合二勺六才

岩代國 十郡高、合七十四万四千二百二十八石八斗七升九合四勺二才

陸前國 十四郡高、合六十九万七千八百三十八石一斗八升

陸中國 十郡高、合四十二万三千百三十四石四斗九升

099—184

陸奥國 四郡高、合三十八万三千六百三十七石七斗五升三合

羽前國 四郡高、合八十万四千五百六十九石六斗九升三合七勺四才

羽後國 八郡高、合六十五万六百三十七石七斗一升一合四勺四才

右之通、分國ニ相成、新田開發仕、御改相成申候

明治三午年中

黨村西根宝蔵寺義今般御一新二付、慶應四辰年覆職致、飯塚播種と改申候  
是ハ當村山伏ニ而候、祈願御座候

099—185

爰に又 御一新二付、元徳川天下之節ハ寺社ト申候ヲ今ハ社寺ト改メ申候

明治二年 村々修験山伏且又天台宗杯覆職いたし

當村宝蔵寺義覆職致シ飯塚左近と相改候處、左近与申者不相成義ニ付

飯塚播種と相改申候

明治四年未ノ二月中 社寺共社地領并寺領共

御朱印地・除地共御調ニ付、村々ニ而相改申候、當村西根

飯塚播種義、此度改而神主と相成申候、是ハ駒形

両社大神之神主也

099—186

鷹巢小野豊と申神主ハ元今大山祇之神主ニ而

今般御改ニ相成候而も村方惣鎮守大山祇之神主与

申立、御調ヲ請申候

社寺・除地・間敷改寺(マ)青雲寺・萬福寺・地藏寺

右三ヶ寺境内除地相改申候

神主方之義も兩人とも除地・境内・立木共相改申候

明治四未年二月中寺社領共 御朱印地・除地等被召上申候

依之爰に書記申也

099—187

爰に

徳川天下之時は御役々様方御知行御取被遊、御簾本と申て、八万騎

有之由、寛永年中今慶應元辰年迄引續、武蔵國ニおゐて

大名・小名・簾本不殘、花ノお江戸ニ居住致、賑ひニ御座候處、俄ニ變し

御簾本中御知行所被召上候

黨村御知行致候御殿様は左ニ

右大沼田村四給之時、地頭左ニ

高九百石 右役人名主重郎衛門・喜衛門・下役初右衛門・幸左衛門・孫兵衛

山木八太郎殿 名主介役啓二郎、此啓二郎と申者名主致度地頭へ

取入、漸々名主介ニ相成候へとも、右重郎衛門・喜衛門不調法ニ付

099—188

右啓二郎義名主同様ニ申成ス

高九百石

真田造次郎殿

高式千石余

右名主勇助後見弥右衛門殿也、下役伊佐吉・茂左衛門・兵藏也

神谷徳太郎

右名主之義ハ大沼田村始り候ハ是迄先祖代々又右衛門方ニ而相勤

申候へとも、下役之者ニ惣四郎・惣七与申者有之、右名主ヲ致度存シ

地頭相取拵、名主又右衛門ハ隠居と成、悴清三郎義、見習役申付、組頭役ハ

五郎衛門・惣七年番名主之心得被申付、夫今小前之者、惣七・惣四郎

不帰依申立、地頭へ訴出候へとも、地頭用役加藤寅と申者、右惣七

惣四郎へ最貞致し、夫今御奉行所へ訴へ相成、漸々濟方ニ及

右清三郎ハ一件中江戸ニ而病死致申候、是ハ組内一件ニ委しく

書記申候

099—189

依之名主之義ハ五郎右衛門・清左衛門・惣七、下役之義ハ政右衛門・菊二郎也

高式千式百石余

小栗上野介

右名主之義ハ金藏・文吉、下役任三郎・米吉・仙藏也

是も文吉義名主相勤度、色々取計申候

右四給ニ有之候處、右小栗上野介様義ハ上州権田村引續キ

(移りカ)

同國高崎ニおゐて不慮之御最期と相成申候、依之

在来と唱申候、外三給之義ハ

（マ）  
簾下土地と唱申候、三給壺組ニ被申付候

099—199

一村一給ニ相成候次第

明治三年午八月中近村村々、一村一給ニ被御申付、銘々

村方入札ヲ以、一村壺人之名主相成申候

當村之義ハ名主弥右衛門と相成、組頭五郎衛門・勇助・清左衛門・文吉、右五人

百姓代之義ハ一耕地壺人ツ、代り〳〵四耕地ニ而四人ツ、

名主壺人ニ相定り申候

日光廳日光縣出廳栃木町出来申候

明治四年未年四月中日光縣出廳石橋宿ニ有之候所、明治四年野州栃木町へ出来候

右之御沙汰同四月中有之候

藩ヲ分□縣と改申候

明治四年未ノ八月中、藩と唱候御大名之領分ヲ不殘縣と相改申候

爰に印ス

099—199

明治四年未ノ十一月中從 大政官被 仰出候儀ハ今般

關八州群間縣除之外府縣被廢更候并

伊豆國府縣被廢更左之

通、府縣被置候事

右之通り被仰出候二付、鄉村江御觸二相成申候

上野國

下野國

邑楽郡

梁田郡

安蕪郡

山田郡

足利郡

都賀郡

新田郡

099—192

栃木町二當時

御本廳ヲ新築被遊候

栃木縣御新築相成申候

慶應四年辰壬四月

合戦二付、館林町并足利町江人足ヲ被仰付候二付、右両町へ人足差

出兼候二付、御総督様江御難願仕御請書之事歌

099—193

差上申御請一札之事

今般東山道

御総督様御進軍二付、人足百人、私共組合并北猿田村組合ニ而右之人足差出候様被 仰付候間、奉承知畏候、依而者今十八日刻限無遲滞、豎町千眼寺屯所へ私共差添着御届、聊差支無之様ニ仕候、且組合拾三ヶ村高村毎ニ取調可差出旨被 仰聞、是又承知奉畏候得共、折節當役とも御官軍様御用二付、館林町へ罷出居、急速相分兼、依而者帰村早々取調可奉差上候、右御請一札奉差上候処、如件

大沼田村

役人惣代

壬四月十八日

喜右衛門

仙 藏

館林

御代官様

御役所

099-1194

覚

大沼田村并組合拾三ヶ村

北猿田村并組合拾四ヶ村

右者明十九日東山道

御総督様御進軍二付、人足百人組合村々ニテ申談、今夕七ツ時雨具并ニ  
式度分喰物用意、村役人差添、豎町千眼寺屯所へ無遲滞可相詰  
候、以上

館林

代官役所 印

壬四月十八日

右村々役人中

追而野村弥市郎・田郷祐三郎兩人江委細申含、差出し申候間、此者へ急申談シ  
無遲滞人足可差出候

099—195

大沼田村始メ

官軍御通行二付、足利町江助郷被仰付、猶又古河町へ被仰付候二付、難渋二付  
申立、両宿勤ニテ難相勤趣ヲ以、館林町 御総督様御越被遊候二付、御歎願  
申上、御聞濟之上、右古河町ハ御免ニ相成候、足利町へ定助郷ニ御願申候、其時廿五ヶ村  
足利町へ定助郷罷出御請書へ調印之義、御日延書ヲ張り左ノ如

差出申一札之事

今般 御官軍様御道中方様當町方へ助郷被仰付、承知奉畏候、殊ニ

御町近村ノ事ニ候間、人足勤ニ差支有之間敷与奉存候、然る処、古河宿ヨリ是又



増助郷之義被仰付、誠ニ当惑仕候間、両方勤八人馬差支ニ相成候（而）ハ奉恐入候、  
依而ハ

御筋江罷出奉伺度候間、歎願中之処、御請書日延奉願上候、為念差出申

一札如件

右 廿五ヶ村

惣代 印

099—196

慶應四年壬四月

足利町新田

御役人中様

右助郷村々 如左

大沼田村 常見村 月谷村

大久保村 山川村 田嶋村

迫間村 猿田村 菅田村

鵜木村 勸農村 椋崎村

八ッ木村 岩井村 大月村

西場村 助戸村 利保村

稲岡村 江川村 名草村

寺岡村

村上村

只木村

駒場村

099-197

右村々惣代 印

足利町軍夫相勤候御書上写

當御支配所野州足利郡

一、高貳百四石貳斗貳舁七合

北猿田村

一、高八拾五石六斗貳舁九合

田嶋村

家数六十八軒

家数十八軒

一、高三百八拾九石九合七夕

勤農村

一、高七百七拾九石四斗三舁五合

利保村

家数八拾軒

家数百五軒

一、高三百七拾壹石四斗貳舁六合

常見村

一、高三百貳拾貳石七斗貳舁壹合

江川村

家数四拾貳軒

家数四十五軒

一、高三百四拾貳石七斗七舁壹合貳夕

菅田村

一、高四百四拾貳石

月谷村

家数七拾軒

家数百廿五軒

一、高三百三拾八石五斗三舁五合

山川村

一、高千七百貳石六斗三舁七合

名草村

家数七拾壹軒

家数三百四拾六軒

一、高貳拾石五斗九舁貳合

岩井村

一、高六百八石八斗七舁貳合

椀崎村

家数廿壹軒

家数百六十六軒

一、高七百四拾六石八斗貳合 大月村 一、高四百貳拾壹石貳斗四舛五夕四毛 小俣村

家数九拾四軒

家数八十三軒

一、高四百九拾六石八斗壹舛九合 大前村

家数百廿八軒

099 | 198

一、高四百七拾三石貳斗九舛五合五夕 山下村 一、高五百四拾貳石 葉鹿村

家数六十八軒

家数百五十五軒

一、高五百壹石壹斗八舛三合 松田村 一、高八百四拾貳石五合三夕三才 小友村

家数百三十六軒

家数九十九軒

一、高百拾石 上菱村

家数三十六軒

一、高八百六拾九石壹斗三舛八合貳夕 大沼田村 一、高九百四石 村上村

家数八十六軒

家数

一、高三百九拾貳石貳斗六舛七合 八柵村 一、高六百八拾九石九斗九舛六合 西場村

家数五十五軒

家数六拾軒

一、高三百六拾八石八斗四舛八合 鵜木村 一、高八百八拾壹石三斗四舛四合 稲岡村

家数四十壹軒

家数百三軒

一、高百三拾壹石七斗九舛九合 川崎村 一、高四百五拾壹石五斗貳舛壹合 追間村

家数十九軒

家数三十七軒

一、高貳千五百八拾五石貳斗三舛四合 上 下羽田村一、高百貳拾壹石九斗五舛五合 下菱村

家数十九軒

家数

099-199

合高壹万七千百四拾三石三斗四合四夕 大沼田村  
北嶺田村

合家数

小俣村  
外廿七ヶ村

一、 軍夫廿八人

但、六月十六日今十月廿六日迄之間勤メ 八月五日今九月廿八日迄 五十四人 金助

勤四十六人

八月五日今九月廿八日迄五十四人 秀藏勤四十六人 九月廿日今十月廿六日迄三十六人

菊次郎 勤廿八人 八月五日今十月廿五日迄八十人 巳藏 勤七十九人

八月五日今九月十日迄四十人 弥助 勤三十貳人 八月五日今十月十二日迄六十七人 藤吉

勤五十九人 九月十九日今十月十日迄廿壹人 松三郎 勤メ十三人 九月十九日今十月十日迄

廿壹人 勇吉勤十三人 九月十九日今十月十日迄廿壹人 兼吉勤十三人 八月五日今十月十日迄

六十五人 栄吉勤メ五十七人 八月五日今九月廿九日迄五十三人 芳兵衛勤四十五人 八月五日今九月

廿七日迄五十三人 文藏勤又四十五人 八月五日迄九月廿七日迄五十三人 傳右衛門 勤四十五人

八月五日迄九月廿七日迄五十三人 清助勤四十五人 八月五日迄十月廿一日迄七十六人 仙次郎

勤又六十八人 八月五日迄十月廿一日迄七十六人 定次郎勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄

七十六人 直吉勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄七十六人 清藏勤六十八人 八月

五日迄十月廿一日迄七十六人 仲助勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄七十六人 太左衛門

099-200

勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄七十六人 文左衛門勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄

七十六人 勤六十八人 甚左衛門 八月五日迄十月廿一日迄七十六人 助左衛門勤六十八人

八月五日迄十月廿一日迄七十六人 竹藏勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄七十六人

德三郎勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄 庄太郎勤六十八人 八月五日迄十月廿一日迄

七十六人 庄吉勤六十八人

ノ人夫 千六百八拾人

勤 千四百五十六人 鍋島道太郎支配所

明治元辰年十二月 野州足利郡大沼田村

名主介 啓次郎

同 鵜木村 名主勤左衛門

同 利保村 名主長右衛門

同 八間村 組頭元次郎

軍夫 御役所

099—201

右之通足利町江軍夫相勤候ニ付、奉書上候也

御官軍様御出張ニ付、差上申御請書之事

差上申御請書之事

東山道従

御総督府様御鎮定被為蒙 仰候ニ付、今日御出役之上、御書付面拜見被 仰付候、左ノ通

徳川領地并諸籙本知行所之義ハ未タ御取上之御沙汰ハ無之候処、浮説流言ニ恐ヲなし

陣屋詰之役人共各退散ニ及、政全廢絶ヲ幸シテ無頼悪徒とも愚民を欺キ

黨ヲ結ヒ官軍之内命或ハ薩長ヨリ被申付候杯与偽り唱ヒ無罪之富家へ押入

金銀ヲ奪取り強請難問申掛、加之及放火、日々乱妨甚く、全生民塗炭之

苦ミニ陥り候段

総督様深ク御憂慮被為遊、一日モ難捨置、依之上・武・野三州徳川并諸籙本

知行所総而当國列藩江被 仰付候間、各藩申合、持場ヲ定、諸方へ人数

099—202

差出し賊徒之乱妨ヲ除クべし、諸藩脱走人或ハ無宿ニ至候而ハ

速ニ可處死刑、尤雖百姓平日之所行ヲ糺、夫々及処置候、元来無頼之徒

蜂起ニ付、仁義常道ヲ以、教諭候義ハ一朝ニ不可行候間

勅命之趣ヲ以、兵威ヲ輝シ可及鎮定候、但年貢諸運上等ハ追々御確定

之上、御沙汰可有之候間、偏ニ民政ニ心得ヲ用、各産業ヲ安シ候様、精々可致  
尽力旨御沙汰ニ候

右之趣キ小前末々迄、早速不洩様申聞、不取締之儀無之様精々可仕候、且又  
此末村内心得違之者ハ勿論、悪徒共入込、手餘候節ハ不取敢御訴可申上旨被  
仰渡、一同承知奉畏候、然ル上者萬一異變之節ハ御人数御差出、御鎮靜被成下  
候様仕度、御願旁、御請一札差上申処、如件

神谷徳太郎

山木八太郎

小栗上野介 知行所

慶應四辰年四月

真田造次郎

足利郡大沼田村

百姓代

099—203

与頭  
名主 **惣**連印

足利藩

御役所御中

元 大沼田村組合拾三ヶ村石高并旧地頭・領主、如左

元

小栗上野介 神谷徳太郎 真田造次郎 山木八太郎 右四人知行所

一、旧高千八拾三石三斗九舛七合 大沼田村

元 田付四郎兵衛 富田帯刀 右兩人知行所

一、旧高三百八拾石 八柵村

099 | 204

元 田付四郎兵衛 大澤豊後守 右兩人知行所

一、高三百六十石 鵜木村

元 竹本歛重郎 土井大炊頭 領分

一、高千百三拾石 川崎村

元 土井大炊頭領分

一、高四百三拾三石 奥戸村

元 小栗上野介知行所

一、高千三百五拾四石 高橋村

元 高木清左衛門・真田造次郎・牧野佐渡守・牧野斧之丞

大澤豊後守右五人知行所



一、 高式千五百八拾五石  
上羽田村

099—205

元 牧野佐渡守・牧野斧之丞、右兩人知行所

一、高九百四石 村上村

元 佐野房之助知行所

一、高千石 寺岡村

元 喜多村龍三・中根仙十郎・小笠原銀次郎

六角主税、右四人知行所

一、高千百三拾石 稲岡村

元 人見又七郎知行所

一、高四百六拾八石 西場村

元 真田造次郎知行所

一、高四百五拾壹石 迫間村

元 本庄宮内少輔・六角主税、右兩人領分

一、高九百六拾式石 大久保村

099—206

右之通相違無御座候、以上

鍋島道太郎支配所

下野國足利郡大沼田村

百姓代

政右衛門

組頭  
重郎右衛門

名主  
五郎右衛門

明治元辰年十二月

官軍御林掛り

鈴木小十郎様

099-207

書置し

形見となれや

筆のあと

しらせたきまゝ、残す

こと之葉

源田五郎右衛門

書之置者也